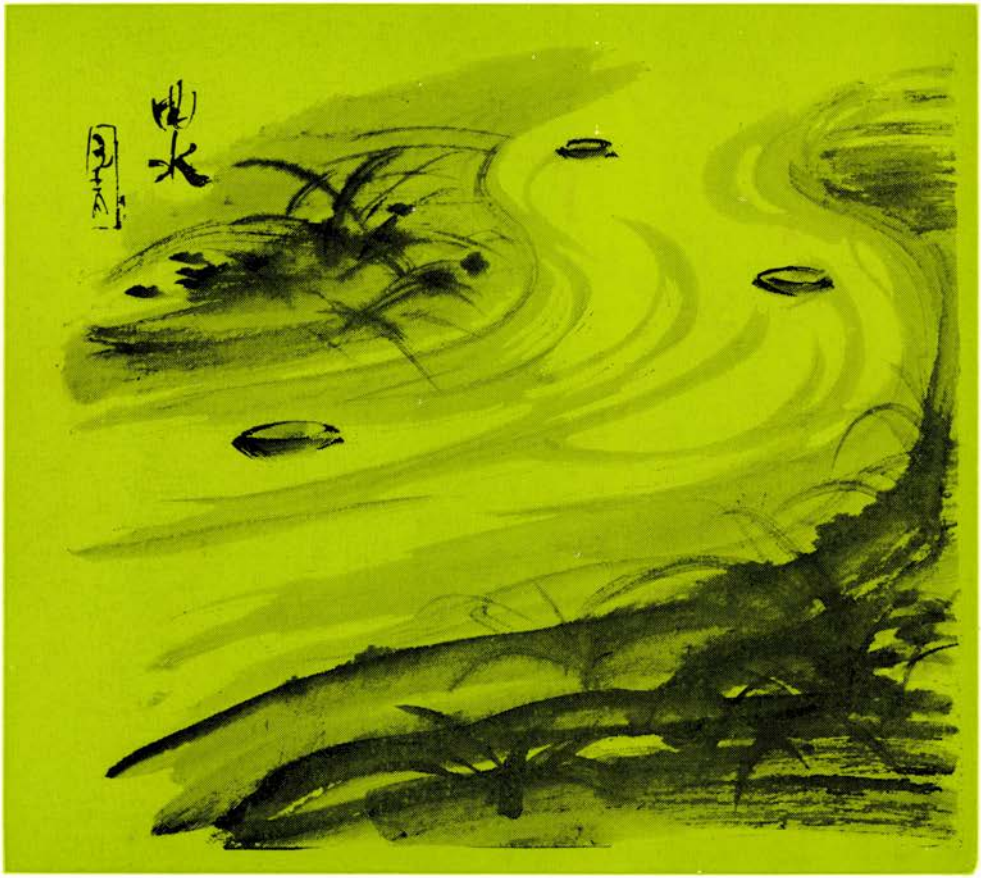
川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十三年二月二十五日　印刷
昭和四十三年三月一日発行（毎月一日発行）
（第三十号）



No. 30

女性縦横座談会と自選百句

三月号

えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛

超特撰
（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、三五〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘 西宮酒造 醸

料理も電話も 551 ここがいちばん
TEL（641）551-2
広東料理・焼餃子
豚饅 蓬莱 焼売
大阪なんば
◆出張販売店◆
なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

一応はあまのじゃくとしての見栄
自分だけわかる詩にしてご満悦
無気味な笑顔鬼が出るか蛇が出るか
例年のとおりえべっさんやめにする
産制をまがおで訓す姑の顔

中島生々庵

今日のことば

私のような生活をしている者にとって退屈という事は楽しいよりも尊い存在である。先達ってその尊い時間に恵まれた。気付いた時はマッチ箱をいじっていた。銀行のやら料亭のやら型やデザインは雑多である。一箱に幾本入っているだろうと調べると二十五本から三十本。こんどは一本一本並べてみた。発火する頭の部分の形が製造過程のせいだろうがおのおの丸味が違っていて小粒のコケシを見る感じ、まことにほほえましい。私の旧作に仔猫ぞろぞろみな宿命の顔かたちというのがある。私の頭にこのそれぞれのマッチにも宿命が秘められているように思われ出した。窮屈そうに箱の中におさまっている間は平和なただずまいであるが、表面だけ如何にも平静な今日の世相に似たところがなくはない。獅子文六氏が書いておられた宮中のマッチ。私共には縁のないものであるが『デザインは大変上品普通よりやや大きく表面の一方はセンイを透き入れたアサギ色もう一方は同じ質の白い日本紙にセピア色の線描で一輪の菊花と葉とクキがかいてある』とある。とにかくマッチ一本火の要慎である。

川柳塔三月号

川柳塔三月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……中島生々庵…(1)
川柳塔…(同人作品)……中島生々庵選…(4)
葭乃先生と故信子先生……不二田一三夫…(2)
自選百句…(同人特集)……後藤梅志…(22)
橘高薫風…(24)
近詠……麻生葭乃…(19)
川傍柳初篇研究…(五十七)……前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫
骨董マニアの骨頂…(大陸巷談)……東野大八…(44)
豊臣秀吉…(四)……冨士野鞍馬…(46)
たわごと……川端東雲楼…(41)
一茶の時代と川柳……吉田水車…(53)
痴盲録……高鷲亜鈍…(19)

私論・柳論

葭乃先生と故信子先生

三月といえばヒナ祭り。江戸の元禄時代に、男の子の〝端午の節句〟に対する女の子の祭りとしておこなわれるようになったが、この本家が、核実験グループの中国であることはご承知のとおりである。

各柳社の年間賞を獲得するのは最近女流作家が多く、川柳塔社でも女流作家の進出はめざましいものがある。女流作家といえば、

国境を知らぬ草の実こぼれあい

故井上信子先生の有名な句だが、

福寿草松にしたがいそろかしこ

これはいうまでもなく麻生葭乃先生の名句だ。ところでこのお二人からなにか共通したものを感じるのである。

古稀以後、めっきり弱られたころの路郎先生から、「わしが死んでも〝川柳雑誌〟だけは、どんなことがあっても出してほしい」と、在社当時前後二回にわたって遺言めいたことをうかがったことがある。

「雑誌さえ生きていたら柳社はつぶれない」と、葭乃先生の余生やぼくの生活のことまでこまごまと話されたものである。

「女性縦横」座談会……（26）
山川　阿茶・前田芙巳代・西出　一栄・中島　小石
三井　酔夢・内藤きさ子・若本多久志・橘高　薫風
中島生々庵・川村　好郎・戸田　古方
近作柳樽……川村好郎選…（32）
秀句鑑賞……後藤梅志…（42）
川柳で破談……川岡霊眼子…（31）
初歩教室……菊沢小松園…（48）
雅号ぶっちやけばなし……松川杜的…（59）
大萬川柳「満期」……清水白柳選…（52）
★柳界展望……（薫風）…（54）
★本社二月句会……（庸佑）…（56）
★各地柳壇……（文秋）…（60）
「先着」……小畠無聖選…（50）
一路集「真相」……石倉旅風選…（50）
「チラシ」……太田良子選…（51）
★編集後記……（白柳・一三夫）…（64）

「故井上剣花坊氏の夫人、信子女史（昭・33・4・16逝去）ほどの人でも柳誌には手を焼かれたようだから葭乃を第一線に立てぬように……」とは、

「こんな苦しい仕事はオレ一代でよい」という夫婦愛からだとぼくは素直にうけとったが、それにしても路郎先生が、その後、雑誌も一代かぎりと宣言されたのは、どうした心境の変化であろうか、あれほど雑誌に執着されていたのに。

剣花坊先生が昭和九年九月十一日に逝去されたとき、信子先生は

一人去り　二人去り　仏と二人　信子

と、川柳人追悼号（二六四号）の巻頭に追悼吟を発表された。

麻生路郎先生は昭和四十年七月七日に逝去。

さらば　さらば　まだ私は夢を見てます　葭乃

これは川柳雑誌追悼号（四五九号）の巻頭にある葭乃先生の追悼吟のうちの一句である。

「川柳人」休刊のころ、

手の届かない　青空が何んになろ　信子

「川柳雑誌」が「川柳塔」と改題したころ、

事務整理

書類焼く火は落城の火とも見ゆ　葭乃

ともに川柳界へ貢献した内助の功は偉大である。（不二田一三夫）

川柳塔

中島生々庵選

冬の夜はボヤもこごえるように消え
さい銭は箱をくぐって元の金
天皇のお言葉をまね恐れ入り
くやしさひとしお泥棒の目の高さ
税務署で米つきバッタバッタバタ

青森市　工藤甲吉

意地悪だけれど美人に育ちそう
働きものの夫へツギの多い服
集金をする顔でなしアイシャドウ
厄除けのぜんざいからの胃が痛み
ものすごい低気圧でウマが合い

岸和田市　内藤きさ子

煩悩に振り廻されている孤独

岡山県　直原七面山

無防備の女へラヘラヘラ笑い
情夫扱いされて旦那にある不満
吊し上げにされるさだめの椅子に就き
いつまでも水堰止められてはおらず

岡山市　服部十九平

水にダム流れることを忘れさせ
流行の周期を信じて手離さず
やりくりは二二が十にして使い
話題絶えストロー指に丸められ
蟇口を下戸に預けて梯子酒

倉敷市　本田恵二朗

冨嶽の図しみじみ眺め新春を酌む
明治百年その六十年がもの足らず
中天を泳ぐ奴に僕を見る

木枯しを電気毛布の中で聞く
いいかげんにせいと腰骨むくれだし

出雲市　尼　緑之助

一年の計無事息災だけになり
いつもいつものように元旦となり
三カ日やっと我が家の俺の酒
女事務さっさっさっとさようなら
東京の子らに見せたい雪の庭

竹原市　小島蘭幸

未完成だから人間生きている
好きな娘がニックネームで呼んでくれ
パッパッと金を使って恋たのし
余情ほのぼの君を送って帰るなり
なにかしゃべって欲しいと僕を黙らせず

高槻市　若柳潮花

舞台磨いて舞い初めさんの部屋にする
想い出を綴る糸さえ古りて切れ
吸いガラの火がころがってゆく寒さ

妹の死を弔む（二句）

老梅一輪黄泉の風に散り
灯明のしきりに動くすき間風

豊中市　寺田花宵

朝風呂の湯をあつくして初詣
初詣で氏神さまに義理をたて
スピッツと留守にまわった松の内
レジスタンス休業の札かけて寝る
歳ひとつとってしまった寝正月

大阪市　正本水客

空っぽの女の眼が押してくる
ぬくい冬の旅に夜の濃さがふかい
氷柱にあたる陽のなかに春が生れている
初心わすれずとはおこがましとも
尾を振っているのは私かも知れない

岡山県　浜田久米雄

きょうも一日言いたいことを押さえとき
散髪をする間は色気失せていず
歩くのが大儀頼まれまいとする
おついでに頼みたい人やって来ず
晩酌のグラス粘ったままを酌ぎ

豊中市　戸田古方

来年も生きるつもりの日記買う
これが真理かいなと思うのが真理
旅行など思いもよらず旅の本
喜びをそねみ悲しみを笑う人であるわれ

仏心になれぬじまいに除夜の鐘

大阪市　橘　高　薫　風

牡蛎殻におのずからなる波の縞
赤き鈎　赤き糸もて人魚は釣られ
ペリカンが怒ればどんな色になる
冬の雷　石仏七千俯瞰の中
人生の果ての祇王寺桜真冬

大阪市　本　多　柳　志

松活けて母娘嬉しい春を待ち
乏しきをかこつに非ず屠蘇の酔い
初詣で格別祈る事もなし
賀状みな倖せそうな文字が跳ね
ささやかな初荷が重い革鞄

香川県　三　井　酔　夢

嵯峨野吟行　落柿舎

じんとくる去来の墓に声むなし

仇野念仏寺

わたしとてやがては消える一しずく
無にかえるまでのいのちを恋やせむ

祇　王　寺

竹林がゆれて祇王の手がまねく

龍　安　寺

きびしさの余り石庭から逃れ

大阪府　早　川　清　生

平和続きおり兵士らは女好き
メキシコへ走る機械となりおおせ
国葬の日の町角の小さな葬
口あいた戦死　バンザイといったのだ

倉敷市　臼　井　三　林　坊

御希望に添えぬに飲んで帰りはり
此の職も一代かぎり百舌が鳴く
鰯雲しばらく画布の物思い
冬の川さりとて頼るとても無し

高槻市　傍　島　静　馬

中空に富士より高く上る凧
既製服プレタポルテと云えば売れ
さむいぼを出してミニがやめられず
ほんとうは近所の見栄でしてる寄付

藤井寺市　西　いわを

名調子思わず唾を飲込んだ
定退をしてまで会社の事に触れ
乾涸びた川で消防出初式

梅里氏を偲ぶ

師を囲み天国で張る句筵

岡山県　大　森　娯　句　楽

帰郷の子中心にしたお献立
つまずいて寒月へつぶやく程に酔い
雪降りになるなと思う風邪をひき
湯加減を云うて初風呂すすめられ

呉市　林野甦光

たがか短大を出て男性不用論
どのくらい寝たかと車掌に聞いている
見送りの手まね何やらガラス越し
よう飲んだもんだと空瓶すかして見

鳥取市　森本法泉子

どの家もねる気配なし大晦日
しめ縄は貧を忘れる飾りもの
病院の元旦冷えた雑煮くる
元旦も新聞少年吠えられる

名古屋市　吉田水車

上品に喰べてもかきもち騒々し
猿思えらく俺の先祖は人間か

日銀再利上げ

カブト町たった一厘とも言えず
恐縮のドアーと知らず靴が鳴り

尼崎市　長谷川三司

一坪の庭も嬉しい初雀
生きて居る喜び朝の髭を剃る

亡鮎美氏を悼いて

納棺へ顔美くしき仏さま
椿咲く主なき垣根なにもなし

今治市　越智一水

あの人が来そうな宵へ和服きる
よくきけば春ですという水の音
初明り雲があるから美しい
人間よ落着けという雪が降り

岡山県　浜野奇童

割り込んで来た子が特等ひいていに
勘定になるとホステス酔うていず
画家の眼が美人をこんなかたわにし
ただで買うようにチケットすっと出し

熊本県　有働芳仙

指先で調子とってるいい話
民主主義飲めば軍歌で意気上がり
ホステスに送り出された雪の街
そばすする音が独りで淋しい日

門真市　福島鉄児

十二月秒針に似た日を過す
十二月口数少ない日がつづく

見透しがついて明るい十二月
銭湯も日曜と云う賑やかさ

大阪市　山川阿茶

古稀をすぎ口紅選ってる大晦日
不自由な片眼にしてるヘヤモード
ルンペンも犬に番さす車持ち
つくつくし杉菜になれば嫌がられ

島根県　藤井明朗

奥様の貫禄少し太りすぎ
道交法初荷は酔えず戻って来
母子世帯へ同情をして世間の眼
見通しは甘いと社長の苦労性

倉敷市　木村長三

日照権とかで下界は争える
八十二もう宮仕でもあるまいさ
名国手患者の意思にさからわず
人間の臭味がのこる貯金帳

下関市　国弘半休

汚職

身に付いた火の子払えば飛火する

孫

生長へ預金の利子は五分五厘

小心

指入れてピースの空を確める
疑えば歩行にバックミラーいる

竹原市　山内静水

あまりにも乏しき財布届けられ
年賀状いと丁寧にもどって来
見てやれぬ宿題貧しき灯にいどみ
ハミングの妻貧しきを忘れさせ

大阪市　大坂形水

ただ頭下げる一手の頼みごと
メニューの思案結局並にする
踏んぎりのつかぬ値札へまた戻り
故郷が年々さびれてゆく話

奈良市　宮口笛生

あきらめています正月駅勤め
開発が日本ズンベラボーにする

グループの旅行

どんな唄でもこなし女中のいける口
酔うている証拠女へ酌いでいる

大阪市　木村水洞

カイロ二個入れて今年も初詣
寝正月出来ない職に三十年

初詣氏神様はほっとかれ
顔ぶれが去年と替る奉賀帳

兵庫県　大江秋月

旅馴れて土産ものには手もふれず
こんな可愛い目をした鼠捕えられ
二日酔いの顔も出てくる初仕事
停退のあとも汽笛を懐かしみ

神戸市　仲　どんたく

光号にて

名古屋からしゃなりと乗った総しぼり
ハネームーンの席のうしろで一人旅
良い経験でしたとバーをつぶして来
鉢巻で獲得しましたお振り袖

美禰市　安平次弘道

成人式和服を議論して平和
目醒しはきっちり鳴って邪魔がられ
そつのない男で金庫まかされず
月並な抱負人柄にじませる

守口市　羽原静歩

この人の急転直下何を言う
ひたむきに生きるというは表向き
人間形成ちょいなちょいなで暮れかかり

明治百年柳に柳の風が吹き

富田林市　川端東雲楼

無口の抵抗饒舌に屈せず
寛容も限度見くびる奴も出来
触れないで花は見るべく匂うべし

亡き娘の幻想

振り向いた娘亡き娘に瓜二つ

大阪市　児島与呂志

ふたりだけの話へ世話焼き割って入り
馬鹿だった女の悲しみ隠さない
大変な事にしといて酔うて来る
その辺で手を打ちましょうと負けてくれ

鳥取県　清水一保

命まで呉れとは言わぬ風邪と知り
豊作がみんな領収書へ変り
政治力に後はまかせて散会し
一票へ襟を正して来た賀状

宇部市　平田実男

魚心へ話しかけてる水心
慈善鍋気付かぬふりをするつらさ
まないたの音はセットをした機械
宿題が違って妻がせめられる

大阪市　室谷鉄舟

其処で事故おましたんやとのびたそば
かがり火に正月の顔浮び出る
好きな人連れて藪入り帰って来
虱わくような頭で熱を上げ

大阪市　天正千梢

犬五匹乗せてバタ屋は世にすねる
すねてみて結局私がほれている
破れればつづくる常識不思議がり
無言の挑戦へ親の方がおれ

岡山県　藤原秋月

人間へ猿も親近感が湧き
置き物も歩いてみたい春うらら
ベトナムの終る日がないカレンダー
急用へダイヤルなかなか廻らない

芦屋市　丸川初甫

頂上の国旗へ遠くくたびれる
天井まで届くツリーで子が二人
待ち呆けだんだん貧相な顔になり
廻り椅子汚職のあとへ几帳面

大阪市　金井文秋

軒切られ寺もモダンに建て直し
年寄りのグループカメラ持っていず
諸物価とゲームのようにノルマ追う
買いかぶったらしく銀行から通い

大阪市　宮尾あいき

猿のまね素顔でしてもよく似合い
貧しくも顔のまろみを失なわず
ささやかな幸せ日曜の朝の風呂
満で云う年は二つも若うなり

枚方市　宮川珠笑

コップ酒勝負しょうぶと酌ぎに来る
引きとめてくれず席立つ足の冷え
部課長はさすがみごとなゴマをすり
云い負けて笑えば家族みな笑い

奈良市　村上春巳

姪たん生
兄弟が寄って名付けへ知恵を借し
テレビから甘える仕草教えられ
今日もまた晴れそう大和路バスが行く
道しるべ半ばうもれて白毫寺

大阪市　福井多蘭子

初夜の朝妻は娘の電話待ち

新年（一句）

晴着の波押し分けて仕事に出
デラックスな歳暮だけが出世をし
披露宴終り勘定だけ残り

東大阪市　久米奈良子

豊かなる稔りを見せて帯結ぶ
夢ひとつ消えて生まれて年を越し
愛憎の渦に舞いまう枯一葉
ふれし手の声をうつろにきく寒さ

堺市　新谷笑痴

自動ドアー不満の音を立てさせず
落ち目とは恥を忘れた歩き振り
抱き込んだ頃に支店長もう異動
赤電話間違ってますと銭の音

大阪市　礫弓彦

よく目立つ白いマスクも釜カ崎
今宮は松の内から恵比須顔
箒目へ松葉落ちてる家に立ち
今年の抱負は寝床で崩れかけ

大阪市　川口弘生

憤慢を聞かせ合ってて長電話
こんな事してていいかと寝つかれず
通知簿で夫婦が争い子に泣かれ
屋上でこっちが東と旅の朝

笠岡市　木山要次

初詣　一句

まだ睡い神を起して無理だのみ
素晴しい知恵が出そうな湯のかげん
掛軸を読んで欲しいとテストされ
慌てたり喋ったり妻はいそがしい

倉敷市　水粉千翁

左手も添えておっとっととこぼし
十年目ここだここだというほくろ
餅搗きのコンビが老けぬ父と母
やけくそになって質屋を通り過ぎ

鳥取市　藤本礎山

妻（一句）

歯を入れた妻が若さをとり戻し
燃え上る怒り涙の眼に消され
素裸で御慶をのべる団地風呂
貰い泣きした同情を利用され

ハワイ　羽佐間柳葉

修身課廃して親子も遠くなり
俺に何故運が向かぬと怠け者
来年がまだあるあると齢をとり

特売日買わねば損とコマーシャル

笠岡市　木山遠二

お上手がなくてピシャリと齢を当て
一家団欒あかぎれの手入れもし
日日好日猫も二八の春迎え
先輩の賀状へ賀状出しそびれ

桜井市　岩本雀踊子

男一匹腹の太さをみせたろか
白足袋へ花緒のきつい下駄をはき
はずみとはこんなにいたい物と知り
似た者夫婦妻もだまされやすいなり

鳥取県　森田布堂

元旦に下着は去年のままでいる
地球など見捨てて来いと月招く
無料進呈結局野心見抜かれる
飛んだあと押えて蚤にからかわれ

富田林市　岩田みよ

美しい女美しからぬ履歴持ち
敵意さえこめた視線で見るダイヤ
追うように追われるように枯葉とぶ
京の冬鞍馬を歩く
冬空を持ち上げ鞍馬の杉の青

鹿児島県　土岐トク子

女房の度胸見なおす下げ相場
夕立に長居の客は又坐り
冷蔵庫予算に入れて気をよくし
食卓に小言も並ぶ大家族

大阪市　不二田一三夫

菓子もろて金持ちの子の馬になり
汚職から議員の一人名をおぼえ

寄席（二句）

いぶし銀のそんな芸では見てくれず
言論の自由NHKに締めだされ

岡山県　田村藤波

神様の人気はお賽銭の高
除夜の鐘幾つきいたか寝てしまい
風雪を凌げと梅の香が諭し

八代市　佐野卜占

情けなや一生月給運搬夫
月給日だけちやほやと燗がつき
やけで飲む酒やなけれど独り飲み

室戸市　奴田原紅雨

金が出来るといろいろの人が来る
張りつめた心ゆるめる灯をくぐり

風が冷めたや宝くじの列

高石市　谷沢好祐

マイナスプラス零税のこと
紅白があるので除夜の鐘が聞け
流行ってる咳も積んでる通勤車

倉吉市　奥谷弘朗

泣けそうに成れば見詰める子の位牌
どうですか一句出ぬかの御挨拶
新婚をチョッピリ妬いて妻若し

鳥取市　河村日満

交差点を手をとり合って老夫婦
タイトルの中に小さき元スター
警察にちょこんと息子反抗期

高槻市　山田季賛

酔気嫌音痴など言うとれず
いざこざがあるからそれでよいと言う
進学の子へ夜の冷え遠慮せず

松江市　小林孤呂二

火の始末たしなめられて松の内
忙中に閑あり末っ子へあいうえお
折角のプラン厄年から採める

兵庫県　河原みのる

吊り革はお立ちなさいという仕かけ

柳　友

笑いなやと本名の名刺くれ
むかしのおんなに会うてみたいほどたまり
春をのぞかす大寒の雨

愛媛県　渡辺暁童

京都府　大鶴喜由

いやでないいやをお袋知りつくし
すねかじる中に喫茶のゼゼがあり
感謝は感謝希望は希望空青し

倉敷市　井上旭峯

汗と血のかたまりで倒産になる悲運
膝少し寄せて女の頼みごと
綻びも直して妻の今日終る

小松市　馬場魚山

一息の命と知らず金を蓄め
酔った事故ブームの中にいる大工
妻に先き立たれ薄ぎたなく生活し

大阪市　西出一栄

改めて今年につづく明日がある
数の子もご祝儀だけの量とする
メーカーのネームバリューを買うお客

たわむれのふるえほんとに震えて来

一月十五日に
成人の孫をまぶしく送る朝

ハワイ　築山快夢起

一年の計など立てないことにきめ
餅つきにカナカ土人の手も借りる
初刷は明治の昔そのまんま

大阪市　水谷竹荘

来るまでは待つとバス待つケチな顔
ほめてくれた人へ盃持って行き
客足がとぎれ調理場めしにする

笠岡市　出原真奇

出不精を孫に押されて初詣で
泣いて来た顔を鏡に見て貰い
旅行でも行くように娘は嫁ぎ

加賀市　木村一路

退院延期
蹴飛ばしてやりたい年をまた迎え
病床の我火の如き我ならず
想い出の頁かすかな音があり

大阪市　河井庸佑

人物と言われるだけの腹を見せ
あげた手をおさえるだけの腹ができ
家のこと全部しゃべって子は帰り

松江市　中川晃男

そこ迄云わすのかと本気に怒り
頼られるボク痩せてても折れるまい
背伸びして猫はこれから出掛ける気

兵庫県　遠山可住

雪の日は雪のこころの酒となる
ええ方に解釈されて黙っとく
猫好きの膝へ丸うなる猫の知恵

小松市　関戸宗太郎

千羽鶴未完のままで退院し
手術してもう新薬に飛び付かず
銀狐タンスの柄へ親しめず

笠岡市　松本忠三

水道が凍り寝ぼけたまま出社
隣席へ婆さんが来てバス発車
人並みに風邪かと友が見舞に来

奈良県　草深酔升

大臣の所感を聞きつつ寝正月
来い来いと顔に来るなと書いてあり
平凡に生きてることのむつかしさ

大阪市　今西章雅

事始め家元の餅気にかかる
芋ぼうだらこれでも暖簾続く京
ヌケヌケと知らぬ存ぜぬおし通し

岡山県　横山一声

飲んで来た夜はそっと床に入り
診察の結果はお酒のせいにされ
スタミナをつけるお酒で二日酔

岡山市　林葵丘

うまず女と思うていたが双児生み
愚夫愚妻それで金婚式がすみ
ホステスのみるオジサマのだらしなさ

岡山県　江国幽谷

独身論今年も一ツ年をとり
帽子きておいでと女に誘われる
鉢の木へ四季それぞれの陽があたり

ハワイ　上田紅溪

旋風すぎてうそのような青い空
老夫婦七面鳥をもてあまし
重ね着をして正月らしい朝

京都市　松川杜的

タレントの都合にあわせた筋となり
胸張って歩けば犬もよう吠えず
改築か移転か子供にせまられる

京都市　都倉求女

お正月だけは日本をとりもどし
日本中を寝不足にする大晦日
日曜大工とうとう正月に間に合わず

倉敷市　野田素身郎

飽きもせず飲んであかした三カ日
初鏡白髪抜くのを諦める
本持ってくれば待つほど混んでなし

宝塚市　小畠無聖

除夜の鐘一つの悔がまだ残り
今日だけは笑顔でいたい雑煮箸
出発の靴磨かれたまだ温み

新居浜市　安藤桂仙

制限速度あとの車の邪魔となり
晩酌へ城主のような気で坐り
灰皿のほこりまみれを出してくれ

大阪市　福井野迷路

百年目国旗国歌が消えて行く
只座るだけで名門あらそえず
ひょっとするとひょっとした患者の死

福岡県　太田湖平

三猿に徹しきれぬのも若さ
下手な字へリューマチ故もないもんだ
勉強しろと言えば机でまた漫画

平田市　久家代仕男

子も孫も帰して猫と居る炬燵
ずばずばと言うて気のいい奴にされ
気楽さは痛む歯のない総入歯

玉野市　小谷仙山

良心が覗くたんびに弱くなり
雑煮餅今年は今年の味がする
面白くおかしく他人の事にふれ

大阪市　中川滋雀

まだ使い道の余生を拾われる
北風に逆らい勤めの朝を出る
父らしく叱って呉れとつめ寄られ

和歌山市　西尾公作

スーパーで袋に袋入れて去に
駅長に風呂呼びに来た田舎駅
背のびした野心小石にけつまずき

姫路市　隠岐不酔

保険屋も医者も見はなす年となり
公認もきまって賀状は写真入り
じいちゃんと呼ぶなと白い髪を染め

松江市　岡崎祥月

見栄と慾のかたまり親は馬鹿なもの
希望すてず老の坂強く生き
大川を跨いで虹の美しさ

八代市　永松道雄

弾き初めの調べは弾む娘のダイヤ
大漁旗迎える浜の留守家族
町内のマイク青田に波うたせ

和歌山市　土谷城石

何もかも駅長一人山の駅
初デイト示し合うたもここの駅
童顔の地蔵は今も道しるべ

泉大津市　高津徹也

気まぐれなバスとも呼ばれ濃霧なり
咳ばらい口調が変る小言なり
エビフライ威張ったようにあげられる

出雲市　原独仙

日の丸が留守居　家中初詣
三カ日どのチャンネルも歌ばかり
奥さんが愚痴る隣りも釣りマニア

岡山県　池田古心

正月の孫年玉の気嫌とり
我れ老いぬ生きる慾のみ冬ごもり
寝正月しなおししたい孫が去に

米子市　石坂新雪

冬眠がこづらにくいと思う歳
俺一人ほしいだけやるとそで酔い

長女成人式

美容師へ抹茶をたてる目出度い日

熊本市　楠田英子

来客のない正月をもてあまし
白菜も猫も一緒に日向ぼこ
いいかけて黙る女の目のさわぎ

泉佐野市　大工睦夫

スカートのミニ化にシューズ伸びてくる
風になびくふりして芒土に生く
せかされて入歯は食事に汗をかき

下関市　桜川不水

いも粥の母に甘える里帰り
みの虫に春邯鄲の夢と揺れ

大阪市　西川誓二

見送りとパントマイムの汽車の窓
怪獣もマスクはずして昼にする

岸和田市　上林加仙

正月の茶の間は孫の保育園
残り福義歯を損じた戎飴

加賀市　細呂木魯木

鳩の群れボスらしいのがよく喰らい
初詣で酒の息かけてすみません

松江市　柳楽鶴丸

お別れのさよなら小さい声で云う
当分の間片肺飛行の倦怠期

大阪市　宮地双楽

盆栽に春を迎えて自由なし
ブルドーザー雑木林も無惨なり

和泉市　西岡洛酔

能面の顔で浮気を妻追求

車内にて

居眠りの美女へ視線の二ツ三ツ

京都府　清水谷句楽坊

八十になって自分を見つけ出し
ひざ火鉢だいて初夢見た和尚

堺市　高橋千万子

ポチ袋やっぱり硬貨おちつかず

相手役忘れた言葉云ってくれ

★

訪台飛行三時間

空の旅インスタントのように着き
日本語で見送られ台湾語で迎えられ
喜劇人集めて私鉄豆をまき
アパートの一軒だけが豆をまき

西尾栞

出嫌いもえべっさんだけ欠かさない
努力努力瓜に茄子をならせる気
年寄りがハッスルなどと笑わせる
ドライブインが景勝を占領し
一プラス一　二にならぬ世と悟り

北川春巣

いいものをあげますお女将の請求書
年頭の訓示考え考え餅の味
余命表へ時々刻々を生き抜かん
老妻も別染という訪問着
ハウ　ドウ　ユー　ドウ　渡米近くなり

若本多久志

控え目の恋を歌麿絵にのこし

菊沢小松園

あした要る金をはずみで引き受ける
神様も許す範囲のロマン抱く
出来ぬ子に誘われ出来る子途中下車
置きこたつ明治の型で寝てしまい

清水白柳

緊張がつづき空ら咳ばかりする
健康に限界がありズボラする
先輩の意見も聞かずまた出かけ

川村好郎

捨てたいもの残したいもの年暮るる
巻鮓の明日を待てない孫四人
自惚れと自信を笑っている落ち目
威勢よく否応なしに来た初荷

大萬川柳

こうやって梅里も清記した夜半

中島生々庵著

川柳講座

大阪府医師会の機関紙である大阪保険新聞に18回にわたって連載され、路郎、三太郎、水府諸氏の名言などもあつめ、初心者用に執筆されたものである。

★郵券五十円封入の方へ一冊進呈。申込みは川柳塔社へ。

くらやみにより光るもの一人知る
よろめいて光りにむかう白い杖
灯芯へ慣れたマッチで火を灯し
紋章が系図のうえに点をうち
ねておきてたべて愛犬と倶にいる
土くれに埋らすまいぞ黒ダイヤ
早朝に起き犬といっしょに寒の水
二十年奥の金歯がボロボロ
三カ日黒いカーテンかけたまま
めくらになって倍増したのがへりくつ
空閨にまんじりもせず夜をあかし
目的がなくてあそびにゆくものか
情けないのは女の紐になり下り
肩や腰やら更年期を揉んでやる
思わざりき旦那盲になるなぞと
疑えば苦しむだけだ信と愛

痴盲録

高鷲亜鈍

河豚ちりへ胃が痛むのを忘れ
ステッキと足がもつれた急停止
盲導をあきらめ狂犬予防だけしとく
高く低く音だして声だして生きる
杖の音ききソプラノで泣く小犬
父と子は男男の仲でして
人類のために山あり海あり生くる幸
身障年金でさっそくお酒買う
じっとして胃が痛い歯が悪い
原因はメチールだったと答えとく

もりあがる額へ四季のシャベル入れ
詩か神か稲妻が眼底を射る
てのひらで人の表情にぎりしめ
先妻の子らに無視されて他国の土に
若き日の頑固を長男もち合し
母に子を抱かし娘尋ねくる
この際住ましてほしい美の都
云うたとてはじまらぬからにが虫かみつぶし
失明のつらさにあらず詩の苦悩
失明をしてなお純粋を口走り

・近　詠・

・麻生葭乃・

さむざむと今年は白の春衣裳
あちこちに湯の湧く国に住むこわさ
お経よむ事が孝行と思うて居
ちろり一杯あけかねるとしとなりしか
かしましやティーン・エイジャーの論争も
日をかけて編みくれしショールあたたかく

川傍柳初篇研究（五十七）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須唖三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

469　いやらしさ妾二タはしやしなわれ　長笑

藤井＝説明の要もない句。旦那は御満悦なのに傍目はいやらしさと観じる。これが夫婦でも

そこかいてとはいやらしい夫婦仲　一・25

とかく岡焼他人の目はうるさいものだ。

川端＝親も養ってもらっているのだろう「親も親なら娘も娘だ」という意味だと思うが。

高須＝妾の媚態を「いやらしい」と表現したもので、女房にはしてやらぬ事も妾にはしてやる。もちろん年令も女房などよりずっと若い。

お妾は元民間に人となりで、そんな甘ったれ方も、旦那にはうれしいのである。

お妾の言う程のこと是となされ　五・8

お妾が何を告げたかしくじらせ　四・30

お妾は面白がって叱らせる　七・3

お妾の昼間は至極無口なり　八・39

等々お妾の句は沢山あるが、大体あまり利口でない美しさ（白痴美）を詠ったものが多い。

前田＝「二タはし」は二箸のこと。従って川端説の意になる。「いやらしさ」は二箸をよく活かしている。

丸＝同。

岡田＝あまい男が、箸で事実ものを妾に食わせてやっていると解している。

470　叶ッても訳のいわれぬ願ほどき　亀遊

藤井＝昔の人は義理がたい。願がかなってお礼に行くのを「願ほどき」といって、行かぬと神罰をうけると信じていた。何の願ほどきだと聞かれても、黙っていそいそと願ほどきのお参りに出かける初々しさ、好いた男と晴れて添えた娘さんだろうが、情味豊かな佳句だ。

川端＝妊娠と思う。「子宝を授け給え」と祈願した甲斐があって願ほどきに行って「何を願ったのですか」と聞かれても、顔を赤めるだけで訳は云えない。

高須＝願ほどきの句は前にもあった。「願ほどきやら帷子に袖頭巾」（初・21オ）

その時も、顔をかくすようでは、悪い願かけかも知れぬと書いたが、この訳のいわれぬ願ほどきも、どうもマトモな願ほどきとは考えられぬが如何？

願ほどき百たび足を運ぶなり　傍五・35

願ほどきわかって訳の恥かしさ　桜・16

後句と同想ととると、どうも礎解かな？

前田＝諸説に賛。「訳のいわれぬ」であるから、いわぬが花で解しなくてもよいと

思う。

岡崎＝川端説の子宝妊娠説賛。だから訳が言われぬところにおもしろさがあるわけ

清＝若い女の願ほどき。その願いごとが何であれ、はずかしくて他人には云えぬ。

丸＝諸説賛。但し強いてその願い事を穿さくするなら、やはり懐妊説をとる。

岡田＝恋愛・婚約でもよかろう。

471 **うろたへた蟬ハ鎧へ来てとまり　嵐弓**

川端＝虫干の鎧に蟬がとまったというだけの句。写生句

高須＝三面子先生は「若い腰元、昼に赤い顔」と言っているが、腰元を蟬にたとえる例ありや？礎解の素直さをとる。

清＝同。三面子先生は蟬のとまった場所を考えられたのであろう。

藤井＝礎解に賛。ちよっと無理だが小生は三国誌の豪傑呂布と、美女貂蟬の鳳儀帝の相会ととれないでもないと思う。うろたえた蟬を貂蟬とした方が腰元よりはきいていると思うが、やはり礎解の素直さをとりたい。

丸＝礎稿賛。「うろたへた」に蟬の生態をつかんでいる。佳句。

岡田＝礎稿に賛。

472 **生涯を半分しら歯にて踊り　菅江**

川端＝昔は、芸者も年増になるとお歯黒を付けた。

すきなこと芸者そめたりはがしたり　二九・17

お歯黒は芸子一生いやと云ふ　八・20

の類句から、普通なら嫁入りして一生お歯黒のままだが、芸者は染めたりはがしたりするので、生涯の半分は白いといったのであろう。

高須＝「踊り」とあるから、橘町の踊り子（町芸者）の句に相違なし。礎稿の引用句で明白。

前田＝吉原の遊女は歯を染めたが、それ以外の玄人女は足を洗うまでは歯をそめなかったので白歯ともいった。従って踊子（芸者）は白歯であった。

丸＝踊り子賛。「生涯を半分」だから、人生五十年の半分二十五才。しかし踊り子には三十を過ぎてもまだ商売をやめない者もあったこと御承知の通り。

岡田＝前田氏がいわれているように、踊子（芸子）は白歯である。礎稿に引用の句は、流行りっ子でなくなると妾になったりそれも面白くなく、またはお払い箱になると元の商売に戻ったりで、そのため歯を染めたり白歯になったり……という場合の句である。主題句は丸先生の句解通り、二十五才以上三十才あたりまで、娘のような長い振袖で白歯でいるのを詠んだもの。

473 **馬のあっちらを通てむごく濡　米子**

川端＝俄か雨の俚諺に「夏の雨は馬の背をわける」というから、「こちらは全然降ってないのにどこでそんなに降られた」と聞かれて、「そこにつないである馬の向う例を通って濡れたんだよ」という軽い程度でユーモアがある。江戸っ子らしい洒落である。

高須＝俚諺「夕立は馬の背を分ける」を踏んまえた句。

夕立に馬を半分ぬらす也　二一・6

夕立は踊り子の背を分けるなり　傍二・24

という句もある。

俄雨はるか向うで蟬の声　二〇・27

俄雨帰って聞けば降りませぬ　一〇・23

丸＝同。俚諺をふまえたつまらぬ句。

岡田＝同。

「川柳雑誌」バックナンバー。〝**川傍柳初篇研究**〟掲載。

「**川柳塔**」バックナンバー。第二号から近刊まで。（創刊号は絶版）

自選百句

チューブ入り誰れか使ったあとを押し
つれそうてえりのホクロに詫びたい日
朝刊がはさまったまま陽が当り
本店へ来て受付は顔なじみ
のこり香に亡妻がいる小抽斗
海へ来て海のひろさに足を漬け
船底へやおら三等横になり
姉の子にやろかはん端の切レをより
北浜でゆびを曲げたりのばしたり
カンニングばかりしてねと恩師なり
種牛のとろりっとした瞳と出あい
油虫ころさぬように母は追い
ゴミ捨場トンボ安心した姿
ウグイスは卵生みまっかと訊かれ
黙ってればいい癇癪へ黙ってる
伝言板外はじゃんじゃん雨が降り
木枯しへひょっこりビラを貼る男
仁丹のツブが出てくる袂くそ
一ひらの紅葉焚くには惜しい色
この辺と思えば風のあるマッチ
眼がわるうても顔色のわかる母
でっぷりと肥えて長屋のうるさ型
いいもんだなと初場所の太鼓きく
俄か雨国旗のひもがまだ解けず
ミカンたべてるのと夜中に起きてくる
るす番をしに母親はたびを出し
とび入りが来たぜんざいがうすくなり
洗濯をするのに小さい橋が出来
そよ風に造花くるっと向をかえ
降ってわいたように揚羽の蝶がすぎ
杯を三つもためてそこに居ず
塩づけの桜がぱっとひらいてる
拝むまねして末っ子も膳につき
風船屋巷の風をすくいあげ
七夕の宵を同窓会ときめ
通勤もたのし風車がくるくると
柿のたねぽとりと秋の音がする
鏡台を男がもてばこけかかり
一泊の寺でおいしいきうりもみ
冷したい頭を窓にもってゆく
沈黙もたのし句箋に背を丸め
落ち目なのか表札が一つふえ
つくねんとして小魚も来ぬ姿
親ごころ酔えば南京豆を買い
よちよちの鼡たたみがめずらしい
ニコヨンの溜り立ったりしゃがんだり
早足のくせどこやらに老いの意地
終電車車掌の腕に助けられ
隅っこのテーブルへ来てまずチーズ
俺んちの皿がまわって来たお通夜

・同人特集・

後藤梅志作品

鎌首のようにまむしのできる指
気のきかぬ団体がいて地下が混み
ようしゃべる奴っちゃと電話待っている
あじさいの花がゆれてる隠れんぼ
猫がいるらしく障子が破れてい
置き場所がこわい親父の辞書を借り
非常口こんなところへ吐き出され
悪人の居ないわが家で臍をだし
まだ十時かいなと眼鏡とる夜長
子供から借りるとすぐに利子がつき
出稽古も工場のけむり来るところ
下駄はいて出直して来た残り福
竹馬になる若竹の節をより
ちび筆の方へ手がゆく硯り箱
云い出せぬまま時のたつ金のこと
スイッチをひねるとはやい油ら虫
早く来た弟子へ師匠がお茶を入れ
記念品なんだか軽いものを呉れ
一と雨が来て宵宮はひっそりし
七月の匂いを立てるフライパン
可愛いいなとおもう金魚の墓ができ
恐わそうに飲むと見事に赤くなり
早よ寝やと子を寝かしとく風の音
飲まぬとも飲むとも云わぬ女事務
思い出の路次へわざわざ来て曲り

句会からうずうずしてる飲み仲間
舌打ちをしたい市場の乳母車
BGの老いおっかない顔になり
長いもの書く気机をなでてみる
毀れてるおもちゃで床屋あやしてい
ものを云うと怒る大工で任かせとき
にこっともせぬ郵便がもの足りず
いいとこがある板前のまえで呑み
仲がいいのに紅の組白の組
掌にのせてしみじみとみる柿の艶
愛称でよばれ愉快な生まれつき
妥協してまんざらでない顔で来る
馴れた手でコハゼ五つの足袋をはき
ハンサムでどこやらぬけたとこがあり
動かない長屋生えぬきばかりいる
お元日猫もいっしょに歳をとり
春の雪万年青も白いものをつけ
合格のうれしさ廊下みて廻り
自分で髪結うてかがやくような笑み
ライオンの横でシャッター待っている
母の下駄ゆがまぬままに古びおり
今にして悔い文学に溺れすぎ
十二月パチパチはぜる物を焚き
まん中の部屋にかたまるお元日
春を待つ小鳥のしぐさ見ていたり

自選百句

乱れ髪　式部の世より恋は憂き
風花の今日タイガースキャンプイン
日向ぼこ　病衣は襤褸になり易し
極月や　わが父の死を立話
聖夜の餐　神父の靴は常のまま
雷蝶　ステンドグラスからこぼれ
蜂の歩くは落武者に似る
キリストの肋に似たる昼寝をし
牛小屋に月光美しき浪費
浴衣着て又一段と名妓たり
惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華
独楽二つ回りいることは息苦し（恋）
十二月　宝石の美の極まれり
砂丘有情　お前と月の出を待とう
旅人も月もやがては去る砂丘
文机に菜根譚を伏せて留守
四面楚歌　故郷は豆の花の頃
都会の夜　セロリは母の香に似たり
湯槽出る男海より出るごとし
本心が二伸に女心かも
学生を矢面に立て国貧し
労働歌　蟻が歌えば凄かろう
礼を尽くし　礼を失し　師と旅にあり
弱肉強食鰐皮の鞄持ち
おととといと昨日と今日の虫の声

娼婦死し　十字架にまた星戴く
六法全書の重さと　聖書の重さ
行灯の灯は恩愛を思わしむ
元日の駅前広場　広場となる
美しいものに雪置く美しさ　（兼六公園）
嘔るは人の飼う鳥　武蔵野よ
大きな滝になろうと思う　父の日に
月光に眠れぬ新しい墓石
進む時計　遅れる時計　夫婦かな
鷲の眼も駒鳥の瞳も鳥の目や
遠き人を北斗の杓で掬わんか
日向ぼこ　梅干の種口にあり
羽根ペンで書きし甞ての文学よ
一枚になれば銀杏の葉の形
絽刺する　余生を埋めゆくような
君おもう熱もまじれる風邪の熱
旅ごころ　旅の前夜を慎むも
煮凍りよ　少年の日は貧しかりき
阿古屋貝売る鋪いつも朝焼けぬ
東郷湖　夕日ところを得て沈む
土に字を書き残し入る試験場
初恋のうすみずいろとなりにけり
恋なれや　われに鬢（たてがみ）あるごとし
韓人の服に最も風薫る
片肌になり　双肌を脱ぐ太鼓

・同人特集・

橘高薫風作品

制帽の汗を先ず拭き顔を拭く
鯉のぼり　氏素姓なき爽やかさ
生まれし時灯ありき　死に行く時灯あらん
われもひとも千手観音　阿波踊
鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ
銀杏散る　風の祭りを見るごとし
恋人の膝は檸檬のまるさかな
みぞおち匂う人妻の恋
灯を消せば　弥勒女菩薩　毛糸編む
元旦や　わけて四十と云う齢は
墓の前　刻去るままに去らしむる
子の寝顔　汝が父母多くあやまてり
魚屋の魚いろいろ妻が病み
妻よ子よ　水の深さが臍を越す
地の果ての如山頂を引き返す
春風の帷に吹くごとき懸想かな
春孤独　眼鏡はずせば　なお孤独
人生譜　柳は日々の風を見す
恩師の死　その夜眠むしとも眠むし
断崖絶壁　断崖絶壁　冬の恋
滝凍る　信ずべからぬささめごと
福寿草　父子兄弟に似たりけり
一人去り　一人去る　聖堂にして
われに過ぎたり　絢爛と死ねる歳
草の芽が出たぞ　おしっこさせながら

大国主命の国の春の雲
消防車　火よりも赤く胴ぶるい
天国に節穴一つ　豆秋忌
柳　ポプラ　柳　ポプラ　水郷よ
蓮の花は一茎一花　恩師の忌
雲の峰　愛憎激しかりければ
鐘の音　さらに身のおきどころなし
紫綬やよし　詩人の胸をいろどるに（三太郎先生への祝吟）
わが鱗歯に裏磐梯は似たりけり
一日の重さ軽さよ日記帳
風薫る　キューピーほどの裸なし
夏雲の死ねば越ゆべき峰ならん
黝々と水かけ不動　恋の垢
蠟燭の数　来し方の女人像
明治村　酔生夢死の昼の月
金環蝕　そらエンゲージリングだよ
霧のダム　紺の背広の龍神か
初冬の恋　鶴の面着て立ち向かう
石くれも三つ積んだら　思惟の塔
元日の冬濤を率て　逢いにくる
汝が祈り　ふかからしむと雪を給う
立ちたくて　立ちたくて　蛇木に登り
お年玉　不兌換紙幣ばかりなり
牡蛎殻に　おのずからなる波の縞
赤き鈎　赤き糸もて　人魚は釣られ

〝女性縦横〟座談会

—出　席　者—

山川　阿茶・前田芙巳代・西出　一栄・中島　小石
三井　酔夢・内藤きさ子・　　司会　若本多久志
ゲスト中島生々庵・川村　好郎・　　写真　橘高　薫風
　　記録　戸田　古方

女ごころ

多久志＝柄にもない大役を引受けまして、とにかく、ぼつぼつ司会をさしていただきます。ある雑誌でこんな記事を読みました。日本女性と外国女性のちがいです。アメリカでしたか、エレベーターに乗ろうとしたところ、時間が三十秒ほど過ぎていたため、今日はこれまでと動きません。日本の場合、エレベーターに乗ってきたお婆さんに事務所の場所をきかれて、わざわざそこまで案内したエレベーター嬢がいたということです。そのちがい、日本女性のいいところ、思いやりと申しますか、感心してその随筆を読みました。男にはわからないよさ、古川柳に

男ならすぐ飲む水を水鏡

すぐ飲むのが男、飲む前に姿を写してみるのが女性、生々庵さんは葭乃先生の「福寿草」の作品を中心にそういう女性らしさを見つけたいというてられましたが、これこそ女ごころというのをね。

生々庵＝女心とは男には真似のできないもので、そんな句を掘りあてたい。

薫風＝女性の作った句、女性をよんだ句も。

多久志＝そうそう。

好郎＝一人一人発言してもらいたい。阿茶さん。

阿茶＝あれへん。

生々庵＝年令によってちがいますね。若い時、中年、老年、今度「福寿草」を力を入れて読んでみました。葭乃奥さんにもそれが見られます。女心の年令層にみる違い。一番お若い阿茶さん、いかがです。

多久志＝〝**よいどれのこれが主人でのうてよい**〟阿茶さんの句でしたね。やれやれと胸をなでおろす。

阿茶＝〝**共稼ぎ外で飲ませぬ酒を買い**〟も私の句。

薫風＝どれもこれも女心ですね。阿茶さん〝**ラッシュアワー私の乳房どこへいた**〟がありましたが。

阿茶＝そんな句たんとあるシ、私、パットなんかいれへん。ほれこの通り（笑）

好郎＝〝**鏡浄め浄め還暦の春粧う**〟小石さんの句ですね。女らしいすっきりした句。

生々庵＝男性批判の句がでてこんかなあ。

好郎＝小石さんの

〝**幸せは愚痴も話せる嫁がおり**〟

生々庵＝これこそというのを「福寿草」から一句。

〝**風に靡く柳でござんせぬ**〟

少し方向が違ってますが、男が作ったんではこうは価値ある句とはなりますまい。

薫風＝葭乃先生の人間像ですね。内剛外柔

多久志＝女性の側からもちっと。

生々庵＝ご自身の句をどしどし。

小石＝ご親切に。

好郎＝きさ子さんの句に

〝**絵のように落花へしばしわれをおき**〟

多久志＝句がでたところで、丁度きさ子さんきはったらしい。男性の句、方大さんのに

〝**麻雀と私とどっちなのあなた**〟

★右から三井酔夢・西出一栄・山川阿茶・中島小石・若本多久志・中島生々庵・内藤きさ子・戸田古方のみなさん。

女にわからんかいな男心。

好郎＝バタバタしてたら喜んでいるのが女や。

薫風＝一栄さんにいい句ありましたね。

一栄＝**針に糸通らぬとしでやいており**〃ですか。

好郎＝女らしい句。

一栄＝のろけになりますけれど、お手伝いさんの手が足りんと、主人が寝間の上げおろしもしてくれます。

多久志＝今の句で思い出しました。

〃**だまされてだまして夫婦信じきり**〃

清風さんの句ですが、私の句にも

〃**だまされている女房の幸せさ**〃

男はやかれん方が気もちが悪い。

生々庵＝あんた悪いことをしてるからや。（笑）

一栄＝男と女、夫婦の愛情いうものは年をとってからでんなあ。

女の抵抗

酔夢＝女らしいというお話ですが、女らしくない私。

芙巳代＝認めています。

酔夢＝私の句に。

〃**小さな抵抗ボタンつけぬまま三日**〃

多久志＝これ以上意地の悪い句もないなあ

〃**とれかけのボタンのような夫です**〃

という句もありますなあ。

好郎＝「三日」ってよろしいな。キュッと利いてます。もう一つぐらいありませんか。

酔夢＝私には

〃**糸をはく蜘蛛よ私は火をはかん**〃

好郎＝性格がようでてるなあ。

生々庵＝葭乃先生が作られそうな句やなあ

一栄さんの句とは大分ちがう。

薫風＝多度津では酔夢さんこんな句沢山作ってはる。

〃**天の星地に哀恋の凍りつき**〃

など。こんな句も川柳塔へ出してほしい。

歩みさる時をとらえて話そうか　芙巳代

粉な雪を総身にうけ別れけり　葉子

こんな句が川柳塔誌をもり上げてます。

好郎＝一栄さんは「針に糸」やけど。

一栄＝妹の清子とは大分ちがいます。

好郎＝その中間はきさ子さんかな。

多久志＝梨里さんに

〃**女なる悲しみおんな酔をする**〃

きさ子さん、この句、わかったようで、わからんのですが。

生々庵＝くやしいのを噛みころして酔いでいる。

女性の批判型

薫風＝女性が女性を批判した句は。

芙巳代＝私の二句を

〃**女ゆえに女のみちをふみちがい**〃

〃**ささやかな抵抗紅を強く引き**〃

多久志＝女のコンプレックス。

芙巳代＝コンプレックスばかりでもないです。

小石＝外に向けていえないことを句の上でいおうとしてられる。

好郎＝川柳ならこそ。

多久志＝亀井勝一郎さんの現代夫婦論を読んでいると「苦労がないといったらどうなる人間は楽しい苦労をもつことが大切だ。家庭の夫婦はもっと自己表現をする必要がある」などとあります。つまり、私らには川柳をすることですなあ、楽しい苦労、それが精神美容になると亀井さんはいうてはる。もっと女性川柳人口をふやしたい。

むつかしい句

生々庵＝薫風さん、女性の句は四つか五つかのことを八つか九つ、少しオーバーにいうているんじゃないかなあ。この間、新聞で池田弥三郎さんがいうてた「女は一体悲壮意識が多い。悲壮感にひたりたい。一寸いじめられてみたい」そこで句を二、三分割引せんといかんなあ。葭乃奥さんのどっしりさは与謝野晶子さんの歌と全く正反対。押えたようでウーンとうならせる。

薫風＝女性は饒舌。ヒロインになりたがる。精神的饒舌というのかなあ。詩・文学というより心の傾向が大切なんやないかなあ。いいすぎると失敗だが。そこで修練。葭乃先生みたいに鍛えんといかんのだなあ。

生々庵＝川柳はただの情熱ひとつだけではできない。人間らしさ。人間を見ること。人間をふんまえ、肚に力を入れて。そこに川柳がある。どうですかしらん。みなさん、むつかしいことをいわず、詩からでも、ユーモアからでも、川柳の約束を学びながら進むことですなあ。

きさ子＝近頃、理解できないようなむつかしい句をつくる人がある。それをむつかしいというと頭が古いといわれそう。切りかえねばいかんのやったら、川柳やめるわ。古巣へかえってくると安心できますが。

生々庵＝真似る必要はないが、勉強はしたいものだ。あれが川柳の進む道かどうかを考えてみることだ。

小石＝わからん句ばっかり作って、わからん選をしてもろて、隅の方でわからんと本音をはいている声もききました。

生々庵＝これは重大な問題で、こんな所でとり上げることじゃないが、お歴々のみなさん、どうすればいいか。とにかく勉強しなければいかんな。ズレがひどくなると、自分の出した句の全没はとにかく、一句もよう抜かぬ、抜かない選者が出てきたりしたらもう邪道というよりいいようがない。

多久志＝共感がもてなければね。絵にだって抽象画がある。とにかく徐々に研究すること、急にかえるのは冒険や。

生々庵＝路郎先生の

〃君見たまへ菠薐草が伸びてゐる〃

はむつかしいが、どう、みんなわかる。

古方＝私流に解釈したら、違ごてると先生にいわれた。

多久志＝あのままいきはったらどんな句ができたやらと心配してたが。私にわかるのはぐらいかなあ。

〃凡聖一如元旦のこころしる〃

薫風＝先生の晩年にも破調が多く、わかりまへんというてた人もいた。私の句だってわからんいう人がいます。つまり考えなさいというんでしょう。それで句の重さ、深さを出そうともしてるんです。これも川柳の進む方向かもしれないと思うんです。自分のものを押し進めたらいいわけです。

好郎＝それでも薫風さん、あんたは自分流でない句も抜いているね。そこが大切じゃないかなあ。

多久志＝その人によってきめることが必要だ。無批判は考えものだ。

好郎＝泣くで十分わかるところを動哭とくる。

古方＝これもことばの遊戯じゃないかな。

多久志＝あてこんでむつかしい句を作る人

もいる。

きさ子＝豆秋さんみたいにわかりやすい句と今のわかりにくい句、あまりにちがいすぎてると思いますが。

生々庵＝いいわるいの話じゃない。指導するものは自分の好みに引きずってはいかぬ。どっちもわかるようになっていねば。

きさ子＝わかる句がわからんようになりそう。

生々庵＝両刀がつかえるようにならんと。

小石＝川柳をマスターした上でやることですね。新しいところへはじめから突込んでいくのはどんなことですかしら。

男を批判する

多久志＝むつかしい句の話はこのへんで。男をぼろくそにいうた句はありませんか。ここにこんなの、銀甲さんに

★川村好郎氏と前田芙巳代さん

〝散髪のしたてつくづく我が夫〟

生々庵＝一週間に一べんでも散髪がしとなる。

好郎＝「おらが女房を惚れ直し」ですか。

女の人々＝「そうそう」

好郎＝女から男を見た句を

多久志＝節子さんという方の句に

〝啄木のすきな夫でものたらず〟

きさ子さんどうです。

きさ子＝私の句に

〝暴力をたかが女の顔へふり〟

芙巳代＝薫風さんの句ですが、どうも気にくわん一句。

〝とせへて女のことばあわれなり〟

こんな女になりたくない。

好郎＝「**ものの値は上り男の値は下り**」ですか。

薫風＝今の句、ありやフェミニストの句ですよ。だって僕は（笑）

酔夢＝〝**ひざまずく求愛何か道化めき**〟

これは私の体験。

多久志＝千容さんの句に

〝ハンサムだけれど頭はからっぽよ〟

好郎＝外にありませんか。

阿茶＝それ、小石さん、女だけの会であんた作った句（しばらく句が出てこない）

〝どたんばへ男案外気が弱く〟

一栄＝〝**左前女の度胸に支えられ**〟十五年前のピンチ。三人の子をいっぺんに失うよりもっと頑張りました。

生々庵＝おそろしい力だ。

小石＝女でしか読めぬ句をと三太郎さんがいうておられました。心がけています。

好郎＝あなたそんな句作ってはるが。

薫風＝昔は女流作家が少なかった。路郎先生の句に

〝もう未練ないが糸屑とってやり〟

〝あいたかったあいたかったと裾をふみ〟

それからこんなの白星さんでしたか

〝鏡舌をならべてみんな不倖せ〟

剣花坊の有名な

〝輝くや元より金に嫁せし身の〟

川柳を勉強する

生々庵＝ご主人をきびしく批判したのは。

一栄＝豆秋さんみたいな句をと願いながらこの頃むつかしい言葉を柄にもなく使ったりしますと、一栄のカラーが抜けたといわれます。

生々庵＝白柳この頃かわったなあ。これも勉強。

薫風＝それが勉強。

多久志＝魚釣みたいなもの。いろいろ釣っているうちに手が上る。

生々庵＝山下清がわしのわからんのは絵じゃない。これくらいいかなあかんねやろが、どうかなあ。

薫風＝平言俗語で訴える。そうでなければ

好郎＝豆秋はやはりいい。

一栄＝自分のカラーを保たんとあきまへんな。

生々庵＝へんに色をつけると怪我をする。若い人なら治りもするが。

好郎＝この頃は叙法や用語に力を入れすぎているんじゃないかなあ。さっきの動哭みたいに。

薫風＝みなさんは永い間、自分の調子、表現でつづけてやってこられていますが、今の若い人たちは外にいいものがありわせんかとまさぐっている。それがいいとばかりはいえないにしても。

阿茶＝地味な服をきつづけてきたものが急に赤い服をきるみたい。

生々庵＝スカートも長くなったり、短くなったり。

薫風＝ロングスカートがみだらに見えてくるというひとも。

多久志＝阿茶さんのに

〃赤きてる方がどうやら男らしい〃

昔の女は我愛するもののために粧い、今は自分のために。女性の流行ってそんなものかな。

女性解放

薫風＝川柳にもいえるなあ。女性解放の句は。

阿茶＝古典ずきの私でもちかごろ「時雨炬燵」をみていてあほらしなった。

薫風＝古典を古典とし、おぼれられん。

きさ子＝私はスパイダースが好き。

多久志＝その点、男はあかんな。

酔夢＝しょっちゅう聴いてたら、スパイダースもおもしろい。

薫風＝スパイダースの方が音楽的に進歩している。

多久志＝これもくわず嫌いにならぬことだな。

小石＝週刊誌読んでたら……これ書かないで、週刊誌なんか読んでといいます。一番新しい勉強ができるのに、そうでしょう。

好郎＝これ、書いとこ、書いとこ。

小石＝この頃ちょいちょい読んではるよう。（笑）

女性尊敬

多久志＝最後に男性が女性を尊敬する句。ぼろくそにいい感謝している男性。

〃別れますかと妻にテストされ〃

という句もあるし、水洞さんに

〃喧嘩してても気になる妻の咳〃

好郎＝〃皺ふえて来たがかけがいない女房〃

〃金あれば別れますとはもういわず〃

二つとも私の句

多久志＝誰のでしたか

〃うるさいとどなって男負けと知り〃

好郎＝きさ子さんにいい句ありましたなあ

〃迎春のここは蓮根ほる寒さ〃

それから

〃草木染小紋のよさも四十越し〃　操子

〃マダムとも呼ばれ小鳥ほど動き〃　花宵

〃何となく鏡に嘘がほしい今日〃　芙巳代

〃外套の左前のが女なり〃

阿茶＝わてら中性。

小石＝それにしても葭乃先生の句には新しいものがうまく入っています。むつかしいことばもつかわず、若々しい感じがする。やっぱり葭乃先生に及ぶものはないなあ。

好郎＝ほんとにいいなあ。

小石＝そなえがちがいますのやな。基本。基本です。

好郎＝きさ子さんはいい句をみると電気にかかったようにピリッと頭の先までしびれる。作らずにおれなくなるって。

芙巳代＝川柳はやめられへん。

多久志＝やめられへんのがほんとやろ。

阿茶＝やきもちの句出えへんの。女はそおっと焼くが、ひどいのは男の方。

多久志＝〃振向いただけで女房につねられる〃

春日さんの句。私にそんな経験あったかな。

（間しばらく）

今日はこのへんで、いい座談会ができました。ありがとうございました。

高級洋菓子
アトラス
堺市役所前　TEL(2)2334

川柳で破談

川岡霊眼子

私の主宰する諫早川柳文化会の会員に、下釜晴紫朗というのがいる。彼は昔壮士内田良平の同志として、若い時から政治運動もやり、自らは天草四郎時貞の母系の末裔だとも称している。現在、長崎県馬術連盟の常任理事の位置にあり、来る昭和四十四年の長崎国体には是非馬術を加えて長崎県民の気迫を示すんだと張切っている。

彼が馬に乗り始めたのは小学校二年頃だという乗馬歴六十年の超ベテラン……壮年の頃、頭山満さんに私淑したとかで、その童顔も頭山満さんその儘の容貌だ。今も七十歳と思えぬ頬焼赫顔の若さをもっている。去る年の東京オリンピックでの学生の県内聖火リレーの時など、自ら伴走者をかって出て先頭に立ち、肩をなでるような白髭を向い風に靡かせ颯爽と駿馬を駈ける様は、古つわものを髣髴とさせるものがあった。

この男が昭和三十九年に妻女を亡された。川柳会では彼の哀愁を慰めようと、一同に図り〃おくやみ〃の兼題を課して会を催した。その折の晴紫朗の句が実感に溢れ、私の選で偶然に特選賞を獲得した。〃先立ちし妻を今さら好きになり〃であった。私は、日頃入選上位の三才には短冊を即書して渡している。その会があって亡妻の一周年忌も過ぎた頃、下釜晴紫朗氏に再婚話が出て、私の処に、その嫁捜しの相談を持ち込んで来た。

私は彼が相当の家屋や土地や借家など不動産を持っているし、別荘も持ち、馬好みの彼のこと、良馬なども飼育している人物なのだから、相当の嫁を世話せねばならないと思って、あれこれと人物評程をして、遂にこの上なしの好女性を見つけ出した。

元長崎駅前で外科医を開業していた顎川という人の娘……娘といっても今は六十才のお婆さんだが、顎川正子さんと云ってすこぶる美人で貴品のある独身主義の全くの処女を推選した。私の家で見合をさして双方意気投合、話はとんとんと進み、それなら一応今から下釜家に出向いて見ようということになって、同人馬場随心翁も共々彼女を伴って晴紫朗のうちに趣く事になった。

それまではよかったが後が悪い。一足先に吾家に戻った晴紫朗は家で待機していた。彼女を伴った私達は晴紫朗の招じ入れるままに彼の家の二階の個室に這入ったと思って下さい。馳走は山ほどチャブ台にならべてある。飲む程に食う程に、双方和気あいあいの中に小宴は進んだ。

酔った晴紫朗翁が階下に小用にでも立ったのか、その席をはずした極めて僅かの隙に、彼女……顎川正子女史が、ほろ酔いに頬をピンクに染めて部屋の中を検分して廻っていた模様である……と、一カ所に来て、壁の前に立ち止って、じっと其の場所を凝視していたが、仲人であるべき私の席に参り、彼女曰く「先生、わたし、この縁は折角ですが、駄目です！。先生どうぞお断りして下さい」と、のたまう。びっくり致しましたネ。「どうしたのか」と反問したら、彼女の言葉たるや、はっきりしたもの、「あの壁に貼りつけてある短冊を見て下さい」という。近寄って見ると晴紫朗前夫人が亡くなった時、彼が詠んで私がしたためた、例の名句？

〃先立ちし妻が今さら好きになり〃である。私がいくら彼女の諧意を求めても泣いて「あの句のように前夫人を慕って居なさる下釜さんなら絶対私に心をお移しになることはない」と、頑として堅く聞き入れようとしないのである。

そこで、下釜氏に助言を私から頼む段階に這入ったが、それも駄目、遂に、名句は彼の再婚を破り六十才の処女は再び晴紫朗の心へ帰ろうとはしなかった。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五一 — 四
夜間 (762) 四四〇八

近作柳樽

川村好郎選

かく耐えて生きん樹氷のシルエット　竹原市　森井菁居

七人の敵そう見ればそうもとれ

あきらめなさいと波紋が消えました

皆聴いて一肌脱ぐのが恐くなり

傍観で済んでたことがふりかかり　姫路市　前田芙巳代

燃えている炎の外にある正義

金魚すくい人生の縮図とも知らず

逆境へ朋（とも）の無口がありがたく

逃げ道を考えている恋の対話

心ない言葉に小さき城ゆらぐ　羽曳野市　麻野幽玄

やり場なき怒り煙草を踏付ける

人間の弱さを悪の果に見る

忘れたい不幸を他人が泣かせに来

酒飲めぬかわりと数の子膳に付き

初夢は今年も思い出せぬまま

空っぽの心に明日の葡萄色　広島県　岩谷二三枝

幸を掬えば指を洩れてゆき

煩悩を鎖して女孤に浸る

爪先へ抵抗心の歩が鈍り

自問自答して真実を確かめる　東大阪市　坂東若芽

孫　二　才

アババにも個性があって面白く

自由を謳歌するよな手の動き

鬼の居ぬ間は洗濯もつけたまま

ハネムーン

子等無事に戻ってからの雨もよし

元旦だ下手なうそだが聞いてやり　広島市　上代美文

柿熟れて見事観賞用に耐え

新年のあいさつ謙虚をとりもどし

大物は逮捕されても胸を張り

入院をすれば仕事がありがたし
横みちにそれた講義で面白い　下関市　志賀木石

もうけとも損ともとれるうるう年
モーニング着ればそのよな顔になり
憶病が分別のある人にした
手あぶりを客に譲って小あきない
来世までは真平と妻に嫌われる　大阪市　黒田真砂

子には子の意見もあってお重詰め
いらだてば更年期だとあしらわれ
齢に抵抗ミニもブーツもはいてみる
マネキンの笑いうつろな定休日
明日嫁く娘心を知る鏡　竹原市　三宅不朽

妻よりも気の付く女で恐くなり
何時とはなしに仏間の灯る三カ日
掌に淡き慕情を湧きくるぼたん雪
レモンにも愁いただよう銀の皿　大阪市　古川静波

狂人の余りに多き世となりぬ
旧友が来てさざ波を立てて去に
政治家が微笑み貧者なお貧し
うちの子が勝ちそう喧嘩止めに出ず　新潟県　高野不二

金貸してやれば賀正も云うて来ず
わが心に禁酒誓うて夜が長い
猫よりもましと云い云いこきつかい
昔のものはよかったと思う桐箪笥　島根県　堀江芳子

酔うて寝て男冥利のお正月
ぜいたくな事だよ鼻の高さなど
あした売る大根小川のつめたさよ
どん底でない貧しさも気の軽さ　東大阪市　杉本公子

枕べのバラの紅さに励まされ
退院の友の肩幅広く見え
ステキだと思う人には彼女あり
春なれや母がえらんだつづれ帯　八尾市　高杉鬼遊

毒舌を素直に愛の鞭とうけ
たこ焼にしばし父と子交わりぬ
不甲斐ないぼくにも一つ歳を呉れ
女憎し狐はあわれ死をさらす　島根県　志賀美栄

紅させば鏡に青春が舞いもどる
ふきだまりこだけ遅い春になり
斐伊川の夕映ピカソよせつけず
四十路の思出たたむ冬衣

倉敷市　河村筒子

改めて着る服もない年が明け
何の癖も直って居らず帰省の子
その頃に乗ってる筈の事故ニュース
歯をむいてみても所詮は檻の猿

伊丹市　貴志千尋

古畳臆面もなく大掃除
酒のほか持てなす術を知らぬ父
女房に手をつく程は落ちぶれず
会議する割に合理化はかどらず

羽咋市　三宅ろ亭

短靴の軽さ能登にも春が来た
絶対にと言い張り相対意識する
借りのある男発言おさえられ
ほめられたことだけ孫はやってみせ

島根県　山本文子

美人だと言われ鏡が好きになり
幼なかりし日を童話のように聴く
懐かしい坂をあえいで里がえり
愛してる証拠しつこく否定する

鳥取県　川崎秋女

二三度の起伏はあった銀婚式
銀婚の旅おあずけで稼ぐ春
金婚へつながる道の第一歩
親馬鹿をむき出にして子を送り

加賀市　木村美穂

愛情を疑うまいとする苦痛
退院の夫へ嬉しさ気忙しさ
示談金後遺症まで気が付かず
落し湯へ今年も無事に終る鐘

大阪市　和田痴亭

尺貫法骨の髄まで七十年
もう妥協してもいい筈茶をすする
最底の顔してママの初喧嘩

大阪市　江城功雄

銅婚の半分妻におんぶされ
喪に混り絆の端をかみしめる
惜しまれる柩へ日射しあたたかし

米子市　林瑞枝

女の夢ダイヤの似合う指も欲し
帰省子に未来の抱負を聞く茶の間
帰省子のみやげの菓子をつまむ幸

米子市　八木千代

人並の果報みくじでたしかめる
それなりの夢に四十路の春を踏む
現代っ子の夢に大臣見放され

島根県　小砂白汀

手応えが無くて相手が怖くなり
約束もせぬ死たしかな音きざむ
春風へプラトニックなアドバルーン

大垣市　影山啓吉

せっかちと言われて退院する師走
表情にさりげなく出す好きらしい
公僕のスローガンにはもうのらず

倉敷市　小幡里風

口先の情と見抜く日のひがみ
硝子張その本心が恐ろしい
も一人の僕に本心さばかれる

倉敷市　川端柳子

先頭の心孤独と勝負する
遊学の旅母心乗せて発ち
授かった子とともに聞く除夜の鐘

下関市　志賀汀花

主婦としてどちら向いてもある仕事
縫える手を持つばっかりに呼ぶ按摩
結婚の記念日でした仲直り

宇部市　櫛部いさ夢

酔うほどに酌する下戸に遠慮せず
資産家の子で浪人をまだ続け
ベレー帽買えと言われて見る鏡

島根県　堀江正朗

さからわぬだけ信念は曲げていず
年寄りはせっかちそんな年になり
涙出すだけの目玉が眠たがり

大阪市　藤田頂留子

しぶちんで暮しの知恵と言って置く
当っても首すじへ入らぬおさい銭
三日だけあとはつんぼ桟敷にある戎

大阪市　大谷重夫

蓮の葉の水逃げ足の早すぎる
生存の厳しさ退院してわかり
口だけの友情もう聞きあきた

鳥取県　鈴木村諷子

社交とや心の重荷贈り合う
串柿の悲哀は店で春になり
外交にも表現緩和というがあり

河内長野市　井上喜酔

新幹線デボチン窓につけ別れ
正月は仏のように寝る親父
待ち呆け妻なればこそ腹も立ち

守口市　田中笑風

仲人のはなし小声を聞きのがし
元本社物置にする儲けよう
陽光の温みをプラットから眺め

大阪市　奥川継之助

しあわせが賀状の墨にこぼれそう
執念が動いたように朝を出る
愛の鞭心に傷はつけるまい

出雲市　森山健太郎

入院所感

加害者の義理のお辞儀へ傷うずく

ただ歩きたい平凡な夢を追い
退院の近い寝ぞうを笑われる
和歌山市　植松美代子

一票をねらう二十才への賀状
元旦を片目でにらむだるまさん
確約のない別れなりちぎれ雲
八尾市　高杉千歩

日に一句期した新春ここに明け
福もらうにも一万円札が要り
ちらし持ち市場中を買い漁り
鳥取市　小林由多香

荒海を灯台母のよう照らし
身だしなみ残り少ない髪分ける
甘んじて受けた左遷へ一人発つ
大田市　藤田軒太楼

おだてには乗らぬと酔が乗っている
ご勝手におどし文句に負けていず
叛かれた淋しさ夜空の星に問い
大阪市　田島英夫

しもやけも義足も春を待ちわびて
長男がライバルになるおもしろさ
水つけてなぜれば足りる髪いとし
和歌山市　増田次昭

ウソだとはわかっていても貸してやり
寝てほしく寝てほしくなし妻の風邪

名刺おき要件いわず旧友は去り
愛媛県　嶝本満子

愛人はあくまで胸の中のひと
人嫌いして玄関の戸がきしみ
あの人は小石にも似て波紋よび
大阪市　河原林比呂路

子沢山稼ぎに稼ぎ地味に生き
三年の療養閉じた夕餉の灯
左遷でも吉日を選び赴任する
京都府　福村飛龍

アイロンのぬくみへついでがたんと出る
もう皆んな酔ったへ二級酒顔を出し
定食の品かず漬物までも入れ
鳥取市　有田とし江

泣くだけを泣いて哀しみ一人秘め
病む夫の泣き事子等は聞かぬふり
卒論のタイプで仕上げの指はずむ
大阪市　岩城太郎

歩いても帰れまいがと少し出し
諦めておけはすげない諭しよう
馬鹿にしていても金ではおれの負
高知県　左狼子

わが胸に還れと母は呼ぶ如し
企みがめがねの奥にひそんでる
娘の傷に触れてはならぬ夜の膳

八幡浜市　平田三立

屠蘇きげん大穴ねらってすっちまい
一年の計元旦と飲み歩き
思い切り頬べた打つもゆきがかり

豊中市　河本雪男

友去りて所在ないまま日が暮れる
飛ぶことも忘れて冬の蠅孤独
うっかりと首のキツネに化かされそう

貝塚市　行天千代

停年が近くますます無口なり
嫁が来てこん立て和洋入り混り
せがまれて行く気になった初詣

青森県　岩淵一星

耕うん機豊かな秋に続く音
禁煙に反対をするのどの虫
上手下手だけは知ってる国の唄

大阪市　大谷カヅ子

寒修行生きる喜び忘れまじ
大晦日迷い込んだか年賀状
今更に晴れ着姿の我が子見る

鳥取市　小谷章代

ことさらに綺麗がってる雪見酒
年玉で父さん株をぐっと上げ
年玉のついでに勉強励まされ

鳥取市　藤本恵子

蓬摘み春を迎えに父と出た
死にたいと言ってるおばさん御飯食う
仕方なく肩打ち孝行とほめられた

鳥取市　不二本和久

本心がどこにあるのか女寄る
学歴で楽に暮せぬ事も知り
無所属が予想通りに化けて出る

鳥取市　藤本佳女

豊作を祝う太鼓が誘い出し
まな板のリズムが唄になる佳き日
盲いても夫の苦闘は見逃がさず

鳥取市　藤本征山

母の手が荒れてるロマンもあったろに
くもの巣へダイヤのようにのる小雨
みんな寝た夜更けへ母の詩が湧き

尼崎市　中谷利美

夫婦とも二つ違いとだけ覚え
二級酒で足る友情は身にしみる
老いて尚おんなは愛をたしかめる

高槻市　山田スミ子

お隣は夫婦して行くゴルフ派手
今年も又ラッシュ男に尻押され
父と子と話を交す夜の二時

大阪市　小谷葉子

寄り添うて蝶も戸惑う星明かり

母と娘の歩巾へ静か風渡る
　　大和郡山市　中内　孚彦

錆ついた過去ブルースに流れゆく
　　姫路市　大久保　大夢子

ガタピシとたまの掃除がやかましい
　　広島県　高橋　鬼焼

白い眼の中でおどけた悔を知る
　　大阪府　井上　美恵子

祭壇用写真撮る気の顔の星
　　大阪市　香川　亜成

近づいた米寿に今日から数え歳
　　鳥取市　山本　珂也女

働けぬ私へ風がきつすぎる
　　鳥取市　藤本　鎭也

明治百年鈍いまんまの母でよし
　　岡山市　押目　白扇

人生は楽しいだろうなあの自信
　　堺市　羽田　一扇

御無沙汰の手紙婚約匂わせる
　　七尾市　松高　秀峰

目をつむれば明日が待っている
　　草津市　久保　和友

社長の前でコーヒー堅く飲み
　　京都府　菊沢　破天

申年が来る結婚の急ぎよう
　　鳥取市　近藤　秋星

歓待をされて年玉はずむ破目
　　大阪市　堀口　欣一

遠慮ない意見が父の気に入られ
　　尼崎市　中溪　慶彦

ビル街の裏から明治見つけ出し
　　大阪市　梅園　摩耶

数の子の値段を子供不思議がり

空腹になって目覚めた寝正月

湯沸しをここに付けたい顔洗う

結局は捨てる空箱俺が捨て

金と地位なかった頃のパパが好き

お隣りへ新婚が来て気がつかれ

銃口が私に向いて夢がさめ

新聞少年太陽が泣いたり笑ったり

手縄をば放されてからのわが力

無理いって中座をしたら強い風

テレビでも雪が降ってる寒い朝

寿命あれば癒るとガンを慰める

釣革に親指のない手が一つ

窓口は切れぬ鋏を貸してくれ

酒に罪きせて昨夜を詫びてくる

むかしなら腹切りものへ慰労金

邪心だったとふる里の寺に座し

口に出ぬ重き想いよさくら貝

諫早市　原田明春

大臣がでるかも知れぬ子沢山
申年のわりに手先の無器用さ

竹原市　岩本文晴

結局は見栄のためにか俺の夢
ホロ酔いの約束子供信じてた

堺市　斎藤亜也

酒もあり餅もあって孤独な春
マイカーで遅刻証明書もとれず

守口市　池田豊平次

十大ニュース明るいニュースよせつけず
新春を猿もタレント並に舞い

竹原市　時広一路

言いたくは無いが黙って見ておれず
朝刊の太字だけ見て家を出る

竹原市　脇本政己

もえがらの五十五をポイトほうり出し
何もかも走るよ僕だけ歩いてる

小松市　四方天弘美

遭難を秘めて銀嶺輝やけり
マイペース他人の口が掻き乱し

出雲市　王紫

安全策そんな言葉を遠ざける
その先を探ぐればみんな嘘に見え

藤井寺市　古結（アキラ改め）百水

肝病んでそれで無くても寝正月
安全訓貼って初荷はしらふで来

熊本市　北川一進

振袖の歩き方からして変り
家中を廻り流感逃げちまい

高知県　山川勝子

歳月はいばらの道を忘れさせ
今年こそみざるでいこうと腹をきめ

呉市　槇田英詩

寂として声なし仏陀の一眠り
向う脛打って我が身を歯痒いがり

河内長野市　小川耕人

電話切ってせわしく動く化粧の手
芋粥を好いた位牌に湯気かかり

大阪市　西本保夫

合理化と云うて無精者をまたつくり
誰もとらぬ受話器とってどなられる

新居浜市　村上水軍

初詣神様一列にとも言えず
まだ見えぬ孫の目先で振る玩具

大洲市　堀内暁風

締切は厳守不足へ再募集
順風もあったと思う老いの果て

熊本市　高野宵草

妻と子に開放されて夜を更かし
欠点をもう長男にうけつがれ

八幡浜市　別宮すき

南国の積雪夫も早く起き
ボーイフレンドの賀状の束に母あわて

広島県　南条露声

娘に着せる晴着へ妻も若返り
元日だけはワイフも静かなり

鳥取県　谷無閑

転宅に菊の根分けをして別れ
新教も御利益はなく金づまり

仙台市　平野光道

のぞいて見るつもり自動ドア開き
訪問着見せたい人あり成人式

龍野市　森下峰子

抵抗なく日めくり明日となるさだめ
他人から見る倖せを不満がり

松江市　鈴木徳雄

風紋の砂丘が語る無限大
二連敗して大鵬の人間味

鳥取市　河口忠志

真相を知らぬ誤解が生む不幸
ひと言も云わさず意表ついて逃げ

鳥取市　藤本和宏

大阪市　塩浜一路

松の内ファイトなかなか湧いて来ず

島根県　大森孝華

久々のかるた取る手へ老を知り
心づくしのホーム炬燵で年を越し

河内長野市　森本黒天子

アフリカ産明石の鯛でそり返り

尼崎市　平井露芳

年賀状喪中につきが又二人

善通寺市　伊藤歌子

ゆるゆると月ゆるゆると陽登るなり
将たるの器と自立すすめられ

竹原市　生信笑子

イミテーションを本物らしく見せる指
あきらめの後より続く悔し泣き

北九州市　藤田独楽

定年の椅子は煖炉にねむりこけ
気は二十髪は五十路をいつか越え

松原市　樫木文清

水仙の気力窓べの陽に笑い
山の駅赤帽一人で用が足り

泉佐野市　大工静子

名古屋市　花東千久良

名古屋市　吉田文枝

竹原市　出島静波

泉佐野市　大工チヨ

近詠

須坂市　高峰　柳児

歯も耳も眼もいたわりへはねかえし
つながれている犬早起きの顔を待ち
自己紹介すかさず商売気がはずみ

小松市　山上千太郎

青年会議所親の光りの名をつらね
晩酌の途中に悪友から電話
孫だちに年玉をやる生甲斐ぞ

今治市　長野　文庫

見るだけでよいとは嘘の荷をひろげ
待遇を比べ凡人気が動き
真冬にもある筍に親しめず

大洲市　米沢　暁明

背をむけて次のセリフを待つ素振り
二度目から見合は二人だけでよし
化粧せにやならず過ぎれば笑われる

今治市　月原　宵明

乳母車百匁なんぼで売る魚
ぽつねんと儂とお前の置炬燵
大寒が好きで水仙顔を出し

たわごと

川端東雲楼

いつも、ふんがいに堪えぬことは、大新聞に、短歌、俳句の欄があって川柳欄のないことである。例を毎日新聞にとって見ると、日曜毎に、短歌、俳句に一頁の大半をあてて論評まで登載されている。それに同じ短詩であって、人間の実生活に密着した庶民的な川柳が、なぜ載らないのであろうか。すでに明治の遺物である旧かなづかい、文語体、古い字書をひかねばならぬ漢字を殊更に使用している俳句を麗々しく載せて、現実に即した、制限漢字、口語体、新かなづかいの川柳がなぜうとんぜられているのであろうか。

川柳は詩としての価値が無いためか、その道にたずさわっていられる方々の熱意が足りないためか。川柳も崇高なる文学であると、自負するならば、こんな継子扱いに甘んずべきではないと思う。

ついでにも一つ、鳥取市の藤本礎山氏のご意見である。「現代の川柳のあり方に、悲惨な面、醜悪な面を詠うときこれを排する事実がある」と。「なぜその真実を詠ってはならないのか。川柳も文学である以上、文学に生きんとする詩人であれば、その真実を詠いこなすことをなぜおもしろくないとするのか」……と。私はこのお説に共鳴する、至極同感である、裏を見るな表を見よといわれるが、表が醜であったなら、惨であったなら、その裏を見よ、そうでなかったなら見るな、詠むな、といわれたなら、川柳は単に偽善的な文字をもてあそぶ「ままごと」というべきではないか。

現在の俳句のように、古い字書と首っぴきで文語体で旧かなづかいであったなら、今の高校生以下では「読むことさえもできぬ」詩であるといわねばならぬ。これに反して、時代々々に即した用語と文字に徹している庶民の詩、川柳は、作詩の時代も明かに、風俗習慣もうかがえ得る貴い詩というべきであると思う。だから礎山氏のお説のとおり、視野を大きくもって文学という立場から、喜怒哀楽美醜善悪の別なく真実を詠いまくって世に濶歩し新聞社の偏見も是正したいものである。

全国至るところに散在する川柳社が敢えて互に「いがみあっている」というのではないけれどもむしろ市町村合併と同じように、相似たる系列が提携し団結して、川柳社協会の如きものを設立せられて短詩界に雄飛するの根幹とせられてはどうであろう。

★

▼**若本多久志氏**（西宮市同人）は米墨の自動車業界視察の帰途（二月五日）ハワイでの談話が〝布哇報知〟に載った。なお同日ハワイウイロー社主催の歓迎句会が料亭石井ガーデンで開かれ盛会だった由。

秀句鑑賞

後藤梅志

嫁を連れ海を渡って行く墓参　（形　水）

ふつう墓参というものはじめじめしたものになり勝ちだが、この句は明るい。しかも海を渡ってゆくという、明るさだ。豆秋に「点灸にてくてく田舎道を行き」という句があるが、これも明るい。趣きはちがうが、どちらも古淡な心境になっている。「墓参」といい「点灸」といい、古るくさいものを苦もなく消化して行くのも、現代に生きる道といえよう。この句の味は人生を味わい尽した味だ。どことなし人柄が出て、嫁さんもしあわせそうな気がする。

汝が祈りふかからしむと雪を給う　（薫　風）

クリスマスの雪にちなんだ句とおもう。「汝（な）が祈り」と詠んで字あまりにならない。すらすらといい句になっている。

掌にのせて、雪を観察すると、六つの花弁になっている。誰れか造化の神意をさとらぬものがあろうか。ただにその雪も、淡雪となり牡丹雪となり、人の気づかぬまに一面の銀世界となる。造化の妙極わまれりである。

「汝が祈り」即ち神に祈るということも、この句のように心の底からこうべを垂れるという、祈りの日があってもよいではないか。

ガツガツと牙を鳴らして冬はくる　（甲　吉）

冬が寒いのと、イヤな季節であることは、いまさらいうまでもないが、この句のおもしろさは「ガツガツ牙を鳴らして」とある。

これは飢えた狼の形容であって、狼はうさぎや人間の骨まで食べてしまいそうである。あたたかい土地ではさ程でもないが、作者の住む周辺、下北半島の海岸などには、この形容が当てはまるであろう。下北の猿は、冬になると、凍てついた樹皮をかじって冬を越すそうだ。冬の寒さが分かる。真実の句だ。

アル中にさせた女をまだ思い　（酔　夢）

これはおもしろい。

しかし、笑い事ではない。男の愛情の、業（ごう）の深さの分かる意味だ。中年でアルコール中毒に患るまでには、親も泣かせようし、財産もつぶしたろうが、惚れた女が忘れられない。他人の目からみれば馬鹿ばかしいが、これが愛情のふかさなのだ。

四国の風土情緒がそうさせるのか、女にそんな魔力がひそんでいるのか、よく分からないが作者の川柳眼は、凄ごいという外はない

隙間風白刃と同じはばで来る　（花　村）

「白刃と同じはば」が出色である。

隙間かぜ、というもののいやらしさは、誰れでもよく知っているが、刺すような寒い、冷たい感じは「氷の刃」という表現でよく味わえる。謡曲「藤戸」の一節に、「氷の如くなる刀を抜いて、胸のあたりを、刺し通し・刺し通さるれば肝・魂も、消え消えとなる処をその儘海に」とそれが氷の刃。すさまじい腹の底にこたえる白刃の巾である。この句は形容の適確さをとる。

明治百年世は元禄となりにけり　（静観堂）

明治百年の句はおおいが、意味の本当に分かってない句が多い中に、この句はましだ。

元禄の世といえば、柳沢の謀略政治時代で民心は大平になれ、質実さを欠き、奢侈に流れていた。その時代が、この句は恰度現代に当りそうだというのだ。ぴったりである。

四十七士でもとび出さんことには、とは明治生れなら誰れしも思う。日本もここ二、三年があぶない。果して佐藤や三木、川島あたりのスタッフで乗り切れるかどうか。

正しく世は「元禄となりにけり」である。

手の筋が話題土工の日向ぼこ　（布　堂）

土工の句を、土工自身が詠んだのでは恐らく句になるまいが、こんなスケッチに思わぬ土工の姿を見出だす。

土工には女もいる、憩いの場は和やか。しかしこの句に女はないが、べつの組にはいる。手の筋の話にもふれる。青雲を夢みた者もおろうし、権蔵くずれもいる。それら土工達の話題は豊富だが、手の筋の話は余程寛ろいだ時だろう。いいスケッチだ。

人間味の通ようのはそんな時かとおもう。

むきあえば素直にとける角砂糖　（奈良子）

人の心が素直にとけ合うシーンと、角砂糖がコーヒーにとけてくるさまが配合されて、いい雰囲気を出している。

「むきあえば」は必ずしも恋人同士とは限らない。女同士でもありうる。ともすると人間同士は、心と心がぴったり解け合いかねるが、それは雑音のせいだ。喫茶店が低い音楽を聞かせてくれるのは、雑音を聞かせない工夫だろう。句を誇張しないで、むらのないように造るには工夫がいる。いい句だ。

計らずもなどと新大臣が出来　（好　祐）

この間新内閣の顔ぶれがきまって、記者会見があったが、大勢の記者を前にして新大臣が一人一人あらわれ挨拶をした。冒頭に「エーこのたび計らずも……」とやり出したのである。「かげで運動をしていたのに」とこちらは思ったが、そんなことは毛ぶりにも見せなかった。これが心臓である。

この句は、時事川柳でありユーモアもあり垢抜けがしていて、まず上等の出来だ。

よく燃える火事へオーバー着に戻り　（城　石）

どういうものか、冬の火事はよく燃える。日本人ぐらい火事に敏感な国民はあるまい、たちまち野次馬である。風ざ向きでどっちへ拡がるかしれないから、野次馬でなくても真剣だ。そうした中にも、かぜを引かぬ要心をする人があるのは面白い。

この句の「オーバー着に戻り」は、その要心をした人だが、出直して行くところにユーモアがあって、風のつよい晩の不安さがハッキリ映る。ユーモラスでおもしろい句。

もめている土地で椿の花が咲き　（若　芽）

「もめている土地」というのは「所有権に紛争のある土地」と解釈するのがよかろう。

土地家屋に関する紛争は、冬の季節におおい。「椿」も冬に咲く。この句は、条件として何ら異論のない句だが、とってつけたようでもあり、人によっては佳句にはどうかという気もするが、いい句だとおもう。

「もめている」といういい出しが、実によく椿の花に釣り合いふっくらした感じがする庭のひろい相当な家だろう、うがちの句。

思考零果てなき雲に我を置き　（二三枝）

「思考零」とは「いま私は何も考えていない」ということを省略していったもの。この頃は〇〇零が流行語だが、句はまじめな句だ

この句は、果てなき雲に想いを馳せているのではなく、ただ無心に雲に目をうばわれている。ある放心の状態を示しているのだ。人の心が静止すると、そういうことになる。つまり我れを置くのだ。

生きるちからは、そのあとから湧く。

傷心をブラックにして明日を待つ　（葉　子）

傷ついた心は療やしようもないものだが、一パイのコーヒーはある時には、救ってくれる。コーヒーをブラックにして明日を待つのは、女性らしい落付もあり、好感がもてる。

「傷心」とは何であろうか。これは深くせん索せぬ。上役に叱られたか、意地わるをされたか、何が出来なかったか、これも傷心であろう。傷つき易いのが女性だ。

この句は、ブラックにして明日を待つ、に洗練されてゆく女性作家の良さがある。

第八回

短詩文学作品展

●会　期　昭和四十三年三月十二日(火)から～三月十七日（日）まで

●会　場　大阪市立中央図書室・三階（西区北堀江御池通五―一市電・市バス・あみだ池下車）

●主　催　関西短詩文学連盟

●後　援　大阪市教育委員会

【大陸巷談】

骨董マニアの骨頂

東野大八

私の友人に、ハシにも棒にもかからぬひどい骨董マニアがいる。

彼の体面を考えて名前だけは伏せておくが、やれ寛斎の双幅が手に入ったの、豊蔵の志野の茶わんがあす届く、白石の蘭の画をみたことがあるかい、などと私の勤め先へよく電話をよこす。あまりうるさくてしつこいので、適当にあしらい逃げをうっていたことだが、それから十年もたったこの新春、岐阜柳ケ瀬でばったりその相手と顔を合わせた。

「やあ、久しぶりだね、ところで例の病気は癒ったかい」

と私は新年のあいさつも手軽に、まずはそう冷やかした。ところがあにはからんや、

「おお、いいとこであった。静岡で竹田の南画を手に入れたんだ、どうだ、いまヒマなんだろう」

と熱っぽい眼つきでそういったのには驚いた。やっぱりねえ、すずめ百までだ、とやがてあきれ顔で、石黒敬七ダンナみたいな、ふとっちょのその白髪面に私は眺めいった。

やがて彼と肩を並べて歩き出しながら、私は北京で、二十余年のむかし、琉璃廠のものさびた骨董屋の街筋を歩いたことを、昨日のように、眼の底に思い浮べた。

中国で、骨董のことを古玩といい、そうした店を古玩行という。北京はその古玩のメッカで、筆頭の琉璃廠はじめ、東安市場、王府井、東西四牌楼、東安門などは、古玩行の密集地帯である。

北京がなぜ、骨董の世界市場として名高いのかというと、前清時代に各省進貢の貴賓がここに集ったことと、乾隆以来代々の帝王が豪奢を好み、多くの美術品が集中した。ために名工の手になる精巧な作品や、洛陽、長安、開封などの地方王候の所持品が、獲官工作や、権門への賄路のため、京市を目指し、それに加えて辺境から、めのう、ひすい、玉石、硯石、玉器も登場した。しかし、革命後の清朝の没落でそれらの品々は、生活難に困った貴族連中が一斉に民間へと吐き出した。かくて、古玩の市場性が加速度に変り、売手・買手の凄じいまでのいん盛さは、北京の骨董を無条件に世界に誇示する結果となった。しかし、取引商品の払底から、それを補うニセモノが当然ハンランするという成り行きも招いてしまった。玩物は贋物に通じるとは正にこのことだといえる。

天津のさる富豪が、古玩にかぶれて収拾のつかぬほどの大病となった。目指すは宝の山の北京。ある日琉璃廠のさる店で、「仲秋賞月図」という一軸をみつけ出した。この一幅は奇妙なことに、軸中の月が一日には新月だが、日を経るにつれ段々満ちて十五日には満月となる。そして翌日から十六夜となり、日をおって細り、みそ日におよんで没し切ってヤミとなる。

「ほう、これは珍物、一体誰の作だね」

と店主にきくと、彼は鹿爪らしく

「落款はありませんが王義之だそうです。実はさる王族の下賜品ですが、値がベラ棒に高いので、お断りしようと思ったのですが、先代からの義理づくで預りものにしているものの、厄介物で本当に困っています」

「フム、値段はいくらだね」

「三万元がビタ一文も負けられんというのです、何分その王家の重宝ですからな」

ダンナは家に帰ったが、さあ眠れない。新月が満月となり、軸中に没したと思うと、また新月となる。さても奇妙なこともあるものだ、といろいろと頭をひねっているうちに、

ふと、これは王義之の霊験が軸中の作品に現われ、私のような古玩熱愛家の魂に応えようとしているのではあるまいか、そう思いはじめるとこのぢいさんは次第、次第に落ちついてはいられなくなった。（これが骨董いじりの持病である）さあ、そう考えつめると矢もタテもたまらない、ぐずぐずしていると折角の珍品が人手にわたる。かくして大枚三万元を奮発するという一大快挙を演じた。

さて、欣喜雀躍して帰宅するや、友人知己親せきを集めて、直ちに神品入手の大祝宴を張った。珍中の珍たる神品を披露して、連中をアッといわせたい。この欲求もまた、この種マニアの衝動的症状の一つである。

「へえ、そんな真黒な軸が三万元？なに、この暗ヤミの底から月が出るってか―？？」

「王義之だって？彼、画も描いたのかいな」

と口々に集った連中は小首をひねったり、キツネにつままれたような顔。それを見回して得意満面のダンナは、今にみていろと心中鼻高々、その自信のほどは祝宴も超ロングランとなった。つまり月が上り、ふとってやせて没するまでをお眼にかけるには、なんと三十日の連続宴席によるしかない。

だが、三日たち四日たっても、くだんの軸はヤミ夜ばかり。一向出ないじゃないか、インチキだ、とみんなが酔眼を並べながら騒ぎ出した。あんまりあんたたちが騒ぐので、出そびれたんだろう、といいながらも、心中不安を覚えたダンナは、かげながら香をたいたり天に祈ったり、しかし、二十日も過ぎたがサッパリ反能なし、とうとうサジを投げたダンナが、その軸を買った店へ出かけてみると貸家札が貼ってある。こいつは一パイ喰ったと気がついたときはあとのまつり。かくてその筋に届けて調べて貰うと、そのインチキ骨董屋は、あらかじめ同じ構図の軸を三十枚作っておいて、一日ずつ相手がくるたびに掛け替えていたものと判った。

日本で下谷物といえば、ニセモノ骨董の製造で仲間内では有名だが、ここのしろものはすぐボロを出すのが特徴である。しかし、中国は悠久四千年のお国柄である。そんなチャチなものは作らない。

まず自分の子供を三つぐらいのときから仕込みにかかる。たとえば、その手筋に応じて王義之なら、その筆法ばかり習わせ、他の字を絶体書かせない。董其昌、文徴明、唐寅、仇英などという明代の名筆家も、文字通りその大家の筆法一本ヤリで成人するまで押し通す。さて、これはという一幅が出来上ると、竹筒に入れてカマドの上におき、枯れ蘆で何日もくすべ続けるのである。

この間、親父だが、王義之とか、文徴明ばかりを捜し求める態を装う。真物であろうとニセモノであろうと、どんどん買い込んでは売り払い、生涯かけて真物の絶品を追う演出をくりかえす。そうした挙句、ついに目指す神品にありついたことを世間にパッと広めさせるのである。それをきいたのが、万金を惜しまぬ、本モノの王や文先生を懸命に漁り歩いている蒐集家である。いわば親子二代をかけたニセモノ作りのたどりつく道とは、正にこの御仁の登場なのである。

端溪の眼を作るのにすっぽんの小便を三年がかりで硯の正中に垂らさせたり、鶏血石のニセモノを作るのに、二十年がかりで毎日新らしい鶏血で煮るというのも中国人である。

私は、さきの友人に以上の話を、まずは委曲をつくして説いてきかせ、その愚かなる極道楽の改心を迫ったわけだが、当の相手は私の長講一席を心静かに傾到してのち、おもむろにいわく

「それだけのニセモノこそ真物以上だね。よし、一つそういう年期の積んだニセモノのホンモノを爾今集めることにしよう」

★

大陸柳人同窓小集が2月11日東京で開催。

近詠

大阪市　**橋本　緑雨**

新年の顔で新婚訪ねて来
金歯も抜くのかとたずねて見
石仏昔話で通りすぎ

和歌山市　**秋月　宏方**

地下足袋が大株主だ屋台店
北浜の怪我は外科医の手におえず
口も手も八丁悪女ともいわれ

豊臣秀吉（四）

冨士野　鞍馬

七本槍

焼香で修羅を引出す賤ケ嶽　（一一七5）

信長の弔合戦は秀吉がやり、大徳寺の焼香でも秀吉に優先され、次第に諸大名の心が秀吉の方へかたむいているのを感じた柴田勝家は、織田家の長老としての面目まるつぶれであった。

そこで勝家は、秀吉を除くべく、天正十一年（一五八三）三月、越前北の庄から近江へ出兵した。この時秀吉は大垣に在って、岐阜を攻めていたので、その背後を衝いたわけである。そして勝家軍の佐久間盛政は、賤ケ嶽を占領した。

秀吉は疾風のごとく、これを襲撃して大勝した。この戦争が、講談などで有名な「賤ケ嶽の七本槍」である。「日本外史」にも大きく書かれてある。

その七本槍というのは、加藤清正、福島正則、片桐且元、平野長泰、脇坂安治、加藤嘉明、糟谷武則の七人で、いずれも勇猛に戦い軍功を立て、後にみな大名になった人々である。

七本で一本つよい蛇の目傘　（一三〇8）
七本の中で丈夫な蛇の目傘　（九七18）
賤ケ嶽火花をちらす鍛冶屋の子　（一五五6）
賤ケ嶽山路を虎が踏み荒し　（一五七5）

などと、川柳はそのうちでも加藤虎之助清正をよんでいる。清正は蛇の目が家紋で、鍛冶屋の子であった。また、

七本の中に二本は蛇の目なり　（六一27）

と加藤が二人いたことも詠まれている。

七本のうちになまくら槍はなし　（七四28）
七本の槍は武勇も一本木　（六〇2一五七9）
七本でつツつきちらす賤ケ嶽　（三五6）
七本の槍後代に名はさびず　（一一八33）
和漢七対武の槍に文の賢　（一四五33）
七本の槍は残らずしづが作　（一三11）

などとほめられている。「しづ」は槍の名作者「志津」にかけた狂句である。

勝家は「鬼柴田」といわれ、秀吉は「猿」といわれていたので、

猿知恵で鬼をあざむく賤ケ嶽　（六一5）
賤ケ嶽鬼をあざむく猿利口　（五八2）

と戯作されている。

秀吉はそれから、四月二十四日、越前北の庄を攻めて、勝家を自刃せしめた。

信長の妹お市の方は、さきに浅井長政の妻となり三女をもうけたが、長政滅び、勝家に再婚し、この時勝家とともに自刃した。残された三女の長女茶々が後の淀君である。

小牧山

秀吉が手を焼いた戦争は、小牧の戦いであろう。

徳川家康は、信長の没後、甲斐、信濃を併せて、駿河、遠江、三河を加えて五カ国を領して強大な勢力となっていた。

信長の二子信雄は、はじめ秀吉についていたが、その威勢の上るのを見て、秀吉を没落させようと、家康にたのみこんだ。それで家康はそれを承知して、一万八千の兵を率いて立ち上った。それは天正十二年（一五八四）三月であった。

家康は、秀吉の機敏な兵力移動を知っていたから、これを牽制するために、紀州の雑賀（さいか）と根来（ねごろ）に一揆を起させた。これに秀吉はまんまとひっかかって、得意の疾風的機動作戦に出られず、ようやく小牧山（名古屋の東北）

に着いたが、ここは持久戦の気構えである。この時秀吉軍の池田勝入斎があせって、長久手（名古屋の東）でさんざん敗北して、池田父子、森長可、堀秀政など、多くの部下を失ったのである。秀吉の甥三好孫七郎（後の関白秀次）も、この時従軍していたが、敵の弾丸が馬にあたって落馬し、命からがら逃げかえったので、秀吉に大いに叱られた。秀吉の本陣は犬山にあった。

犬山へさるとは下手な御陣どり　（安二智2）

犬山へ長久手を出し猿は負け　（一四〇15）

長く手を出してやけどは池田炭　（九六36）

長く手を出して猿猴もちあぐみ　（四九36）

小牧山歯をむき出して御立腹　（三八19）

などと秀吉敗戦を狂句に作られている。

十一月に、秀吉は、家康、信雄と和睦して家康の子、結城秀康を自分の養子と、人質的な縁組をしたのであった。そして秀吉の生母を家康へ人質とした。

仲直りお袋様をシタに取り　（明二仁3）

小牧山長く久しき御手柄　（五七10）

小牧山猿の生肝ぬくところ　（一〇〇17）

猿面の生きもをぬく小牧山　（八六21）

小牧山松にしおれた猿おがせ　（一二三28）

等、江戸時代の狂句であるから、家康の方に好感をもって詠まれている。

この年（天正十二年）に秀吉は、従三位、大納言に任ぜられ翌年には内大臣となった。

★

★

窪田久美子著
句集「笛」寸評

沖の帆の速度　女の日月曳き
傘きせて　母の心になお遠し
手を温め　母の便りの封を切る
わが母の路地から出ない子守唄
母の膝は　小さくなって猫の膝
木枯しのポケットにある母の文
炬燵の背寒く他郷の地図たたむ
正月のしずけさに餅ひびを増す
冷え込みも月の形も今日のもの
いつわりを庇うかたちで足袋を履く

一頁から七頁までの巻頭からの十句をそのまま並べたが、「笛」一巻を端的に窺うことが出来る。即ち、女がいる。詩がある。そして温かである。句は斬新でありながら微塵も虚勢がなく足が地についているのは誠実な人柄の故であろう。椙元紋太序、時実新子跋の間の二百余句は未来への期待を抱かせる作家の一人であることを頷かせる。

フリージャを購う　手袋の黒は脱ぎ
南風なら翔べそうな風見鶏
二人を容れてアカシヤの影濃くなりぬ
群を抜ける　声を合せて啼けなくて
若葉に眩み　轍が深い女坂

B6版百二十頁、定価四百円。発行所は東京都杉並区高円寺南四丁目三七の一九　窪田久美子方。　（薫風）

川柳塔社常任理事会

来年一月号で通算五百号になる。ことしの十月は改題三年目である。これをどうするかを討議したが、見送る意見が多数だったので記念句会は開催しないことにきまった。

同人句集刊行の案も出されたが、これは実現の可能性が強く、しかし準備に相当の時日を要するので同人諸氏の盛り上がりを待つことになった。

地方同人諸氏のご協力のおかげで読者のふえていくことはありがたい。

出席—河井庸佑・傍島静馬・戸田古方・大坂形水・川村好郎・金井文秋・清水白柳・中島生々庵・菊沢小松園・西尾栞・不二田一三夫諸氏。　（二月三日）

初歩教室

題 「表情」

菊沢小松園

表情という今月の題は難かしい部類に属する、頭から心理的なものを要求される題は総体に創るのに骨が折れるようである。しかし骨が折れた方がよい句も得られ作句の勉強にもなるといえないこともない。自分の気に入った課題で組し易しと思ったものに案外皮肉なもので佳い句が生れず何事によらず苦しまねば本当のものは出来ない道理である。ローマは一日でならず苦吟の深さは楽しみに比例する。こつこつ一歩ずつ進むことである。

入試発表喜びと悲しみ別々に戻り 英詩
涙に歪む顔をカメラのためらわず 万竿
表情に涙かくして左遷され 耕人
表情には出さず痛いところをついてくる 真砂

淡々とアナウンサーの大ニュース 美栄

①例の入学試験うかった喜びと落ちた悲しみとが一緒に見に来ても帰りは別々に戻ったという近所同士なら一層罪だ、中七がよい。②美しい人も心から泣いた顔は見られたものでないカメラは非情で躊躇なくやる、句材の把握がよい。③左遷されても表情にも出せずにこやかに別れを告げる、すまじきは宮仕えの入学試験うかった喜びと落ちた悲しみとが一緒に見に来ても帰りは別々に戻ったという近所同士なら一層罪だ、中七がよい。②美しい人も心から泣いた顔は見られたものでないカメラは非情で躊躇なくやる、句材の把握がよい。③左遷されても表情にも出せずにこやかに別れを告げる、すまじきは宮仕えの中に一場の光景がまざまざと現わされて、あますところがない。②この題に税務署を噛み合せたのが面白いが表情苦情が目障り。③嫁がせて男親の方が反って言葉少ないだけに反って淋しさを感ずるものだそうだ、この句もそれを詠んでいる。④過去を忘れたい当人とそれを知りたい他人との間では自然表情のない人間にならざるを得ない、無表情も自己防衛の手段である。⑤この頃の娘には珍らしい、理由があってこんなに育ったのだろうそれがこの句を詠ましたのだろう。

④戦後強くなった女性、繊細風にも耐えなん女性が突如物凄い反撃しかも弱点を握って、ゆめ心許せぬ世の中ではある。⑤残業ともなれば面白くも可笑しくもない、ビックニュースも平々凡々表情も変えず句材の選み方に今後を期待したい。

告白へ火花散るよな眼に出会い 一扇
無表情税務署苦情聞いていず 亜也
嫁がせてからは無表情な父になり すき
無表情過去のことには触れさせず 同
表情に喜怒表わさぬ娘に育ち 三立

①告白を迫まられてふと相手の眼を見ると烈々火花の激しさを感じたという、短かい一句の中に一場の光景がまざまざと現わされて、あますところがない。②この題に税務署を噛み合せたのが面白いが表情苦情が目障り。③嫁がせて男親の方が反って言葉少ないだけに反って淋しさを感ずるものだそうだ、この句もそれを詠んでいる。④過去を忘れたい当人とそれを知りたい他人との間では自然表情のない人間にならざるを得ない、無表情も自己防衛の手段である。⑤この頃の娘には珍らしい、理由があってこんなに育ったのだろうか、考えさせ

表情がどうのこうのと舞台裏 千梢
成人の日の表情に夢を秘め 花子
人真似が出来るあわれな猿の表情 湖平
客用という表情で店に居る 弘美
いささかの表情刑事の見遁さず 同

①表情のことまで舞台裏では問題にしているが、当人も家族もそれどころかやっと出られるだけで大変だとの意。②成人の日の希望に燿やく表情を、句主の当時にだぶらして美しい思い出を詠んだのかも知れない。③苦悩にあえぐ人間の表情なんか何んにも知らぬ猿よ真似るなとこの句はいう、だが取越苦労性の人間の思い上りに過ぐまい。④落語家のいう営業用の笑いというのがあるが客用の表情とはうまい語句を見附けた、句の表現に動かぬ語を見出すことも優れた句を創り出す基礎の一つだとおもう。⑤残業によって一寸した表情にもピンとしたものを感じるのだろう、上五の用法で一句の纏りがついた。

言いかけて表情変ったのに気附き 誓二
にこりともせずにべアの差額受け 光道
表情を殺して管理職らしくなり 同
返事とは別に表情ふてくされ 千代
表情に希望持ったが断られ 同

①いわゆる癖に障ったというのだろう、表情が変った相手に気附いていいかけた話題を変えた、ほんとにこの世は住み難くい、格調のあるいい句になった。②ベースアップになった給料の差額を受けたのである堅い表情で、要求に遠いベアだったのだろうか、考えさせ

られる句③。管理職というものは余りにこにこせぬものらしい、少なくとも職場においては、そこでこの句が出来た下五が面白い。④現代っ子の一面は突いているがいい切って終って余韻がない。⑤愛想のよさについ油断して安心していたら案に相違して、これが見合の場合なら悲劇になる。

表情もかえぬ女の暗い過去　　秋　女
正直なこころ顔色すぐかわり　　同
気まぐれの化粧鏡へ笑って見　　初　甫
一瞬の表情刑事が見逃さず　　鉄　舟
みていると馬にも表情おもしろい　　徹　也

①試練に堪えて来た女の強さがよく現われている、そのものずばりの表現がこの句の力強さを感じさせる。②句にもその人が持つ独自の型が現われる、よくいえば個性悪くいえばアク、達者は達者なりに同じ型が出るそれがこの句に出ている、句材において纏め方において③時と余裕に恵まれた人達の退屈な生活の一片の報告である、それだけに精一杯の努力で生き続けている一般の人達には縁遠い情景である。④如何に装うても偽装はやはり真実ではない、一瞬の戸惑いに本当が顔を出すそれを見逃さぬのが追う者の強よみといいたい上五の厳しさを買う。⑤素材の面白さで成功しているいわゆる軽味の句。

表情で聞かせるはなし手も動き　　破　天
表情に出さぬ決意を母は知り　　紫
声帯模写顔まで本物らしうなり　　同
表情の動きへ話題変えてゆき　　正　朗
沖縄の表情書いたり写したり　　同

①なるほど句は纏っているが、正直過ぎて全部のものが出てしまっていて後に何も残らない、余韻のないのは深味のないこと。②隠している決心も母の眼には隠し終せなかった、血の強さが迫る。③同種の句が数句あったが覘いが一番判り安すかった中七が面白い。④その場面が生々しく表現されている、主客ともに真剣に生きて行く努力が窺えて考えさせる句になった、余韻のある佳句。⑤時事吟として成功に近い軽快さが好感が持てる。

瞬間の表情嘘と見抜いたり　　芳　子
満足な表情やっと乳離し　　同
表情も変えず上手なうそをつき　　啓　吉
責任を問われていても無表情　　比呂路
表情に出るほど余裕出来てくる　　同

①範囲は広いが前掲鉄舟君の適確さに劣る、突込み方が浅いというのか。②この方はいい情景がはっきり出て微笑しい中のやっとが時間の推移も現わして面白い。③この句の弱みは同巧が多いことだ、それだけに一寸油断すると蒸発してしまうことだ。④現代の無責任な時代を諷刺しているが、軽く扱って底の浅い句になった。⑤この方はやや厚手の句、生活が大きく顔を出していて第三者に響くものを持っている。

いいわけは表情見てからのことにする　　頂留子
眉一つゆるがぬ老舗という自信　　同
表情も変えず悠々逮捕され　　保　夫
表情とは別の言葉が口をつき　　同
何気ない表情闘志は内に秘め　　軒太楼

三十年妻は表情よく見抜き　　同

①人間の狡るさは対手の様子を見てから態度を決める、自分に落度がある場合でも尚且そうした手段を用うる確かに人間の一面にメスを入れている。②眉一つ動かさぬという表現はぴったりこの語でこの句が生きた。この語でなければならぬという語句を探求することも一句を得る重要な要素である。③罪の意識の少ない人の姿がよく出ている。④扱い方は達者だが底が浅い。⑤上五の軽い出方が後の語句に対してよく用意が行届いてよい。⑥上五が面白いが内容の浅さが難。左記二句佳句として。

顔色も変えぬ器でおそれられ　　白　汀
あと一歩ここで表情崩すまい　　同
本心に触れたか笑い顔歪がむ　　選者吟

四月二十日締切　六月号発表
題「土」
宛先　大阪市阿倍野区王子町四丁目番22号2
菊沢小松園

ご投句にはなるべく
ご使用ください。

川柳塔柳筥

一冊　六五円
送料　三五円

先着

小畠無聖選

先着が何時も馬鹿みる同窓会　鶴丸
先着も手ぶらで帰る超特価　宗太郎
先着をガッカリさせる指定席　魚山
先着は夜汽車で着いた国訛り　筒子
先着は母ちゃん千切れた旗をふり　無閑
先着の旗が呼んでる二重橋　宵明
先着が居て自信がくずれかけ　軒太楼
先着を後ろへ回すコネを持ち　庸佑
先着をイライラさせてまたも釣れ　みのる
先着は大空仰ぎテープ切り　祥月
先着の順が崩れる通勤車　美栄
先着を睹けてたバスが延着し　十九平
先着がしびれ切らせて飯にする　慶彦
もめぬいて先着順でけりがつき　弘朗
乗車券持った幹事がまだ見えず　木魚
常会で先着レース編んで待ち　白扇
割り込んで先着順の顔でいる　古心
先着順と言わねば売れぬ物を売り　耕人
一着と二着ビデオで撮り直し　公輔
エプロンを借りて先着茶も運び　千代
混雑を見越しホームへ先に着き　忠志
先着が待った皮肉を聞かされる　秋月
先着に憎らしい程の社交性　保夫
先着と遅刻それぞれ策があり　千翁
先着はヒッチハイクの女連れ　利美
先着が粉雪の中で待たされる　杜的
不断着の先着しだいに落ちつかず　素身郎
タッチの差先着としてトップの座　柳子
ママゴトによるにも先着順があり　奇童
先着の時計やっぱりすすんどり　幽谷
混浴の話で先着沸いている　章雅
帰宅したあとから着いた旅だより　暁明
先着は遠路わざわざばかりなり　恵二朗
先着の足の達者が迎いに来　百水
先着はもうインタヴュも済まし　白汀
先着の占領しとる股火鉢　藤波
合格の報服屋から先着し　どんたく
しきたりが先着順を押しのける　代仕男
おれよりも気の早いのが列をなし　ろ亭
お待ちかねですよと女中につねられる　芳仙

佳

のんびりとして居た方が先に着き　露声
箒目に先着があり下駄の幅　旭峯
先着のバスがトイレを皆ふさぎ　梁水
先着の靴踏みながら上って来　可住
先着や思たら先着きてはった　古方

人

頂上の汗先着に心地よし　芳子

地

先着の順を乱した花名刺　要次

天

先着がまっさきにつく寺の鐘　秋女

軸

海猫の先着山の雪もとけ

真相

石倉旅風選

真相を知らぬ病人だけが笑み　英子
真相を語れば私も好きでした　和久
憧れた都会の真相夢が消え　佳女
政界の真相女将に教えられ　宗太郎
真相にふれたくはない過去をもち　無閑
真相を聞かされ親は慌て出し　木魚
真相を小説にする週刊誌　露声
戦争の真相勝った方が曲げ　章雅
真相を話せるまでに病いえ　白汀
真相を孫は知ってて味方する　芳子
真相がわかればみんな善意なり　正朗
真相を明かして仰ぐ空の青　七面山
真相と別に判決書が書かれ　十九平
死屍に鞭うたず真相葬られ　利美
真相が世に出る頃は忘れられ　慶彦
真相をみんな知っているから黙り　千翁
赤坂の灯に真相がもみ消され　可住
真相を胸にたたんで孤独なり　可住
真相を寝言で言ったとは知らず　筒子
真相を知らないままに癌で逝き　どんたく
真相はなぞネオンのうつる堀　光道
真相を辞世の歌にしてのこし　藤波
真相を伏せてお通夜の香をたき　孝華

真相を知っているから笑って居　古心
真相をかくして汚職まだつづけ　英詩
真相はこうだと語る生き残り　旭峯
コミュニケの真相沖縄かえらない　秋月
フイックション やさしい真相 ゆうみせ　古方

佳

真相は小遣い欲しい肩を打つ　小四恵子
真相は知ってサンタクロース待つ　小四恵子
クエッションマーク真相を構想す　古方
真相を知ったその日から無口　素身郎
真相を打ち明けられて力貸し　珂也子

人

真相を解かねばならぬメスを持ち　幽谷

地

真相を遠くの町で聞いて来る　千代

天

真相は妻が社長である悲劇　礎山

軸

真相は映らなかった気の病

チラシ

太田良子選

チラシにはメーカ品と書いてあり　鶴丸
ライバルの店にもチラシ配られる　要次
出血のチラシ長屋を総出にし　痴亭
チラシ見てやって来たらし探しう　庸佑
パパ政治ママチラシから朝を読み　白扇
主婦連のチラシが街へ話題まき　章雅
開業の歯科医も暇かチラシ入れ　勝子
商魂のチラシが四季を先走り　梁水
特売のチラシに妻も早出する　千代
商戦のチラシが舞うて街平和　千翁
年中を半額奉仕するチラシ　トク子
チラシ迄読んでベッドに暇があり　秋月
新聞少年チラシで重いペタル踏む　素身郎
女性だけに呉れるチラシが気にかかり　保夫
女房がみるまでチラシほっとかれ　古方
景品があるからチラシ貰っとき　英詩
パートのチラシへ妻の眼が動く　杜的
一枚のチラシでもめるスキャンダル　可住
これでも言わんばかりのチラシ来る　弘朗
売切の節はとチラシ予防線　不二
園児等の列を乱したチラシビラ　筒子
結局はチラシに載らぬ品を買い　宗太郎
損しても売るかのチラシ読んでる　湖平
飛行機のチラシ二階の屋根に降り　芳仙
スーパーのチラシへおびる小商売　秋女
商魂はチラシに暮をかけている　軒太楼
ライバルのチラシをほめるほど自信　いさ夢
客を呼ぶてがありチラシは先着順　芳子
安売のチラシの品は済みました　礎山
欲しいものチラシで見たるタイミング　征山
開店の運をチラシに頼りきり　鎮也

佳

ライバルのチラシは念をいれて読み　藤波
サンドマン或る日チラシで鼻をかみ　里風
湯の町のチラシ丹前だけに呉れ　宵明
金かけたらしいチラシで鼻をかみ　七面山
新聞へうちのチラシも入って来　幽谷

人

母さんの朝新聞はチラシだけ　柳子

地

きょう限りのチラシがきょうも配られる　奇童

天

アルバイトチラシ四五枚ずつ配り　十九平

軸

一枚のチラシが選挙違反をし

第二百回（復活第五回）

大萬川柳

「満期」

大阪 静波
集金へ愚痴をこぼしたけど満期

藤井寺 吸江
旧姓のままで満期となる保険

岡山 十九平
満期来年それまで万事我慢する

山口 弘道
満期日を手帳に金利で食う暮し

東大阪 綾女
明日満期つづけることに決め寝る

大阪 滋雀
満期まだかいなとやりくり指を折り

大阪 小松園
満期近くなって受取人変える

倉敷 梁水
それからを停年のない土に生き

藤井寺 百水
満期日にあわてる程の金でなし

堺 一扇
満期もう当てにしないほどたまり

大阪 真砂
倦怠期満期があればなあと思い

大阪 文秋

入選総表

選者 清水白柳

投句総数 六百三十八句
入選 五十九句

よっぽどの不運満期のあとで焼け

門真 鉄児
満期まで生きてるかいなと掛けつけ

大田 軒太楼
満期あと一回妻のへそくりも集め

島根 芳子
積立てが満期さっさと娘は旅行

鳥取 日満
長生きに満期の保険まで飲まれ

大阪 野迷路
保険満期考えるうちに寝てしまい

堺 素郎
へそくりの満期言おうか言うまいか

下関 木石
着陸をすれば満期になる保険

倉敷 千翁
もう満期来たかと齢へ目をこする

米子 瑞枝
満期近い証書も添えて嫁がせる

大洲 暁明
盃の満期除隊を子に聞かれ

大阪 阿茶
満期までつづかぬ貯金又始め

和歌山 次昭
満期にはこうなりますと夢のよう

倉敷 素身郎
満期になってみれば葬式にも足らず

大阪 比呂路
返済を満期来るまで待たされる

鳥取 珂也女
満期まだ来ない保険で借る師走

大阪 鉄舟
就職も嫁も決って満期待つ

岸和田 葛城
満期前もう要ることが湧いており

倉敷 恵二朗
定年と満期を合わす皮算用

鳥取 佳女
死ぬはずの保険満期へまだ達者

鳥取 透風
満期まで待たずに死んでやりたい日

鳥取 和久
無記名のへそくり満期でばれちまい

大阪 章雅
契約満期出てゆけがしに家賃上げ

岸和田 きさ子
姑に満期の金がある強さ

八尾 千歩
一年満期にしても桜の頃を選び

鳥取 和久
毎年に満期作ってくらす知恵

小松 宗太郎
満期の日計算に入れ新調し

大阪 肅佑
家が建つはずの満期で墓地が出来

尼崎 慶彦
忘れてた養老保険が満期なり

西宮 多久志
もう、の方が長い満期へ指を繰り

笠岡 要次
満期まであと十年の身をいとい

大阪 比呂路
へそくりのように忘れていた満期

大阪 肅佑
掛金に夫婦喧嘩もした満期

尼崎 慶彦
満期まで掛ける積りのない保険

尼崎 慶彦
拾うた金貰える満期の日も近く

大阪 柳志
大口の満期へじきじき支店長

堺 一舟
満期まで掛けてどうなる貨幣価値

堺 草春
掛金が無駄でよかった火保満期

尼崎 慶彦
銀行定期満期が近いおべんちゃら

鳥取 佳女
保険満期嫁った娘にまで当てにされ

佳句

堺 一舟
積立ての満期にあわせ子を産む気

門真 鉄児
好きなものも食わず満期も見ずに死に

堺 草春
長生きはして欲し満期の金は欲し

尼崎 慶彦
満期まで自分の金に利子が要り

鳥取 佳女
新築へ定期満期が踏み切らせ

人ノ句

藤井寺 百水
保険満期ハンコあれこれまださがし

地ノ句

倉敷　素身郎　二　柳志
予備校は予定にいれてない満期　三　好郎
天ノ句　四　文秋
倉敷　三林坊　五　弓彦
そむいた子だが満期まで掛けてやり　六　慶彦
選者吟　七　光道
カー月賦満期も待たず次を買い　八　きさ子
大萬ベストテン（二月現在）　九　十九平
（同点の場合は投句先着順）　十　吸江
一　素身郎　一三、〇　倉敷　十一　水客

九、〇　大阪　十二　秋女
八、五　高石　十三　清人
七、五　大阪　十四　多久志
七、五　大阪　十五　ゆきを
七、五　尼崎　十六　草春
七、〇　仙台　十七　代仕男
七、〇　岸和田　十八　要次
七、〇　岡山　十九　瑞枝
七、〇　藤井寺　二〇　千代
六、五　大阪　二一　千翁

六、五　鳥取　二二　形水
六、五　大阪　二三　日満
六、〇　西宮　第七回「悪酔い」　五句以内
六、〇　宝塚　締切　**三月二十日　厳守**
五、五　堺　第八回「荷札」　五句以内
五、〇　平田　締切　四月二十日　厳守
五、〇　笠岡
五、〇　米子　投句先
五、〇　米子　大阪府高石市高師浜三丁目五―六
五、〇　倉敷　**川村好郎**
五、〇　大阪
五、〇　鳥取

紋太先生から四月号へ近詠百句をいただき清記して先生にもう一度目を通していただいた。

―不二田一三夫宛。

ありがとうございました。まだ右が使えませんので書き違えてすみません。今、左の練習中です。

あとまだ五百句未発表あり、こんご慎重に作りたいと思っています。

大八氏にハガキを貰い、今にも返事を書きたく思っています。正夫氏にはいそがしそうです。どうぞ薫風さんにも生々庵、白柳氏らによろしく。

お蔭さまで二月が来ました。よい時候になって欲しいです。この処、早いのがよいか、遅いのがよいか分りません。とにかく寒いですねえ、みなさんによろしく。

鰻谷でなしに勝山通りの宛名に、ハハアお宅だなと〃恋猫〃の表紙（二月号）のように思いました。

（椙元紋太）

一茶の時代と川柳

吉田水車

一茶の一生は作句消息の不明とされている時代を除いて、第一期間を享和元年から文化十年までの十二年間の江戸時代、第二期が最後まで故郷で暮した文化十一年から文政十年の十三年間とされている。作句生活はすべて上記の二期間になされ、漸く生活の安定を得た第二期においての作品が多いように思えるが人口にかいしやされている「故郷やよるもさはるも茨の花」等の句は当然第一期江戸時代の作品である。

そこではなはだ礼を失した訳と思うが、ほんの私見を述べてみたい。一茶の芸術生活のもっとも旺んであった年代即ち享和、文化、文政にはすでに川柳翁も亡くなっていて選集「柳樽」も三十篇前後を数え、この頃の内容には見るべきものがなくなっていたとはいえ充実した初篇乃至五篇あたりが、もしも一茶の目にふれていたとしたら、一茶の生涯置かれた、江戸時代の環境が、俳句の鉄則である風雅から放れた独歩の表現を試みさせたものであるにしても、感情をむき出しに詠う手法と川柳との間に一脈通じるものがあるような気がするのである、といっても私は一茶の句が川柳の影響を受けたものであると申す訳ではない。

一茶の句は一字変えると川柳になるという説を、どこかで見たが何字変えようとそれは立派な俳句で文学上でも認められている。ただ人間一茶を敬愛するあまりと川柳の発達過程の年代中に生きた点に奇縁を感じ、私なりの詮策をしてみた次第である。

☆柳界展望☆

ハワイウイロー社同人による若本多久志氏（右端）歓迎句会

（橘高薫風担当）

▼平安川柳社昭和四十三年度の事務分担責任者が次のように発表になった。総務部北川絢一朗、会計部西沢青二、同人部田中秀果、編集部坂根寛哉、発送部井上高雄、句会部桂ひろし。編集部に若手を揃えての刷新に期待がかけられる。

▼中島生々庵氏は毎日新聞（二月五日付）の朝刊〝健康と家庭〟に南区医師会会長として談話を発表された。主幹担当のNHKの川柳は三月二十四日朝七時から第二放送で発表、題「笑顔」

▼伊藤勢火・定子句集「途上」刊行記念句会が三月十日十時から国鉄天王寺駅二階会議室で開催。兼題・仏像―素生選・騒音―言也選・多忙―不二也選・途上―勢火選。席題三題―各題三句―十二時締切、会費千円句集呈、軽食準備。投句ご辞退―申し込みは奈良市西大寺町二三二六―三、駅前住宅四一一号、伊藤勢火方川柳平城の会。

▼川村好郎氏（高石市同人）は一月末、出雲大社から日の御崎へまわり、海猫の群れ見て一畑薬師から大山。松江の出雲屋でうまい鰻に舌つづみを打ち宍道湖から玉造温泉へ、ただし男ばかりのヤボ旅とのこと。

▼奈良番傘二十周年記念川柳大会は昭和四十三年四月二十八日（日）午前十時から県公会堂で開催。兼題、瓦・旅・匂う・南部・影・紳士・芝・結ぶ、各題三句投句は四月十八日までに百五十円分切手同封の上、奈良市東寺林町三八奈良市役所内奈良番傘川柳会宛。

▼句集「銀箭」が一月一日岡山県苫田郡鏡野町かゞみ川柳社から発行された。服部十九平氏の序がある。昭和二十七年から昭和四十二年までの題詠句抄である。「秀才は汽車から故郷見て通り―周甫」「片足になってもおんなじ虫の声―陽子」「二号にも味方があって形見分け―喬女」「名物というからこんな物も売れ―古心」

▼富柳会（富田林市）では一月二十一日松本吉太郎氏の退院、吉岡美房氏の昇進祝賀会をPLランド桜月亭で開催。

▼明治百年記念第十三回全国川柳作家合同句集参加作品が募集されている。一、自選十句（新作、既発表いずれも可）二、住所氏名雅号年令職業、三、四月三十日締切、四、用紙は四百字詰原稿紙、五、参加費四百円（記念特集号呈）六、発表は六月記念特集号、七、届先は大阪市東区南新町二の二四橋本言也宛。主催ふあうすと川柳社

▼第七回平安賞作家は中村土竜氏（津市）（「喝采の中でピエロよ何度死ぬ」など作品十句）泉本玲子さん（山口市）（「信じてもあしたはちがう雲の色」など

藤本礎山氏が指導する豆川柳家の入賞者

▼中島生々庵主幹は川柳塔が第三年の新春を迎えたのを機に、一月十九日午後、病臥中の椙元紋太先生を訪問、川柳塔主幹としての挨拶とお見舞いを申された。「ふあうすと」から、不二也、言也、天樹の諸氏が、川柳塔から白柳、すゝむの両氏と薫風が同行した。

▼椙元紋太先生から、「昨十九日はご多忙中をわざわざお越しありがとう存じます。今しばらくと存じましたが残念ながらお引立めもなりませんでした。しかしながら誌上にていつもお目にかかるも同様。今後ともご風交を願います。」不二也、言也両氏からもご丁重なお礼状に接した。

▼若本多久志氏（西宮市同人）から編集部の一三夫氏と葉子さん宛にメキシコから旅信。―ハワイの歓迎句会は二月五日にきまったようです。ただいまメキシコを見物中、明二十八日はニューヨーク、サンフランシスコを経て四日ホノルル着の予定。――異国の旅十日茶漬けの味恋し――多久志

の十句）と決定した。

▼時の川柳社賞昭和四十二年度受賞者に新葉美野路氏が選ばれた。

▼鷺羽川柳会新春句会は一月二十一日王子ケ丘で開催

▼清水白柳氏は一月十八日午後一時から、和歌山東ロータリークラブ例会で「川柳と狂句の違い」について話をされた。なお二月には但馬の出口へ商用で行かれ雪を見るため城崎まで足をのばされた。―窓ごしの雪見るだけで外へ出ず―白柳

▼「川柳道場」（倉敷市同人水粉千翁氏を中心にした作家グループ）三十号を記念して第二回川柳道場懇話会が一月二十一日（日）玉島円通寺良寛荘で開催された。匿名のグループ作品を俎上にして、活発な批評が交換され倉敷新聞に二回にわたり記事が掲載された。定金冬二氏と薫風が出席した。

▼大森風来子氏帰日歓迎第二回岡山県川柳大会は一月二十八日（日）午前十時から邑久町公民館ホールで開催。「この目で見たアメリカ」と題して風来子氏の講演、スライド映写があった。席上、昭和四十二年度マスカット賞の受賞式ありその栄誉を受けられた。藤川良子さん（倉敷市）が

▼松村万古氏は私の主宰する水島川柳会から、ますかっと賞受賞作家が出て嬉しいですと。

▼松川杜的氏（京都市同人）は一月二十五日から富士五湖、伊豆網代温泉、熱海と周遊、絶好の冬日和で富士の百態を思う存分味われた。「籠坂峠富士を探すに一苦労」

▼川岡霊眼子氏（諫早市同人）は新春の川柳色紙に氏持前の絵心を発揮、句とともに好評を博された。「猿曳きの紐の儘なる三番叟」

▼山田季賛氏（高槻市同人）は一月十二日新大阪を出発日南海岸公園、えびの高原指宿、長崎鼻を巡遊、四泊五日の同僚二名との旅を楽しまれた。「南国のよさ雪ちらちらと又楽し」

▼浜野奇童氏（岡山県同人）は学校の勤務地の婦人会の短詩会に招かれ川柳を楽しまれた。また校長さんの要請で参観日に川柳の話をして好評であった由。

▼堀江芳子さん（鳥取県）は島根新聞の新年文芸川の三席に入選、三年連続入選を果され友人から祝福されたと。「つり橋がゆれて不気味な川になり」

▼三井酔夢さん（香川県同人）は一月十四日川柳塔社へ。翌日京都の苔寺、天龍寺、落柿舎、祇王寺、龍安寺などの庭園を鑑賞された

▼江城功雄、谷垣史好、吉居奈々のどんぐり川柳会グループの諸氏が一月十二日来社、柳談火を吐くの感があったのはさすが「近作柳樽」陣の猛者らしかった。

▼川村好郎氏（高石市同人）は二月十一日（日）玉島二月句会に出席。

▼児島与呂志氏（大阪同人）は備前川柳社の新年句会へ出席して最高賞を獲得、目賀芳月氏作の（彫物師）楯へ浜田久米雄氏が筆をとった豪華なものである。―ふりそでのよさは女を女にし―与呂志。この賞品を久米雄氏が春巣氏へ来阪の節に届けられた。なお句会へ春巣、孤舟、凡々、正則、与呂志諸氏が出席された。

▼第四回堺市民総合文化祭川柳句会が三月二十四日一時開催、会場は南宗寺内第三幼稚園保育室（阪堺線御陵前電停下車東へ三丁）兼題・線香―痴笑選・敗物―雄次郎選・紀州街道―左久良選・フトン太鼓―摩天郎選。会費百円、作品集呈。

▼藤本礎山氏（鳥取市同人）は二月七日来社、主幹ご夫妻や編集部の一三夫氏や葉子さんと歓談。

▼橋高薫風は二月四日奈良春日大社の万灯籠、興福寺の鬼追式を見物。今回も村上春巳氏の好意で案内をしていただいた。

新同人紹介

土岐トク子
―一三夫・生々庵推薦

江副牛亭

庄司萬象
―霊眼子・生々庵推薦

竹浪浪寿
―味平・生々庵推薦

本社 二月句会

会場　自安寺
八日　午後六時

さすが立春とあって、数日前の寒波はどこえやら、おかげで盛会である。ただ入口にいつもある句会の日布がなく、句会日変更かとおもわれた方があったようで、ご迷惑をかけたことをおわびします。

柳話は白柳氏。興味深い選者の立ち場からというテーマだけに大受けである。小集の場合、または大会の場合、その時、その場で選の方法を変えることなど、さすがにベテラン選者の貫録じゅうぶんである。とくに大萬川柳の選などの苦心談には、じっと聞き入っている人が多かった。

きょうの出席者には生々庵著「川柳講座」を贈呈した。これは大阪保険新聞に連載されたものである。

二月句会の月間賞は不二田一三夫氏が獲得した。天位三句入選のうちの一句がそれである。九時閉会。

（河井庸佑整理）

出席—与呂志・いさむ・静馬・双楽・紫香・瓢太・県吉郎・天笑・白柳・没食子・水客・滋雀・痴亭・貞山・金三・酔升・弥生・静歩・一三夫・一舟・肖二・綾女・宣介・柳宏子・白溪子・たつみ・加仙・柳太・弓彦・小路・摩天郎・形水・一扇・太路・恒明・珠笑・誓二・芙巳代・三求・千梢・喜恵・万的・舟遊・凡九郎・頂留子・三喜造・吸江・一栄・進之助・笑痴・生々庵・勝晴・庸佑・一路・雄峯・伊三郎・清人・〆女・野迷路・季賛・観岳・文秋・薫風・葉子

席題「初恋」　阿部柳太選

初恋の思い出のある宿にする　文秋
母だけに判る初恋案じられ　滋雀
初恋の人がゲストに出るテレビ　小路
初恋で覚えてるのは手の温み　野迷路
あっさりと消えた初恋大事がり　清人
いい年をして初恋をしゃべらされ　庸佑
初恋のレターに花と星と月　芙巳代
祖父ちゃんの初恋おもしがって聞き　紫香
初恋の女からなろうた酒に酔い　たつみ
初恋は枯娘だった戦前派　清人
初恋の思い出司会が妬いて聞き　白溪子
初恋のいま修道院にいるうわさ　一三夫
ニキビつぶして初恋なやみ出し　雄峯
初恋のおんな借金とりにくる　三求
初恋の何を食うたか覚えてず　静馬
自叙伝にちょっぴり初恋ふれてあり　吸江
初恋の頃のかき船南の灯　笑痴
大寒のベンチも初恋苦に成らず　雄峯
初恋が今の女房である平和　文秋
初恋もあったと仲居撥を持ち　笑痴
金婚式初恋で添うたをすっぱ抜き　生々庵
初恋は名前の知らぬままでよし　恒明
視線合うだけでもうれしかった頃　一扇
がしんたれ同士初恋はかどらず　天笑
初恋の痛手独身主義を取り　失名
初恋の頃は女神に見えた妻　静馬
初恋はみんなピンクの色に見え　柳太

席題「寒むがり」　丹波太路選

寒むがりを不問にされる齢になり　一路
着ぶくれてまだその上に着るつもり　小路
寒むがりが裸踊りを得意がり　吸江
寒むがりの癖にぬるい湯につかり　柳太
寒むがりにしないつもりで子を育て　三求
寒中水泳みているほうが寒むうがり　喜恵
これ以上着られぬ程に着ぶくれし　庸佑
オーバーを着たまま寒むがり座り込み　形水
足袋のまま炬燵にいても背を丸め　吸江
寒むがりが一枚ぬいだ騒ぎよう　庸佑
寒むがりが一番先に湯をあがり　滋雀
コタツからいじける子供叱りつけ　静馬
寒むがりが手袋忘れて引き返す　綾女

川柳たましま十周年記念大会

時日　昭和四十三年四月二十八日十時
会場　玉島農業協同組合会館
一、特別表彰式　服部十九平氏　本田恵二朗氏
二、「たましまへの苦言」十九平、恵二朗
三、柳話　〃川柳小話〃　川村好郎
四、兼題　「円満」　中島生々庵選
「満足」　大森風来子選
「拝む」　逸見灯竿選
「けむり」　時実新子選
「手紙」　浜田久米雄選
「哄笑」　篠原北斗選
五、賞、知事杯、市長楯、文化連盟会長楯、議長楯、商工会議所会頭楯他。（以上六点取り切り）
六、投句は受付けず。
七、会費は追って発表。

寒むがりが何かと焚火の世話をやく　誓二
寒むがりもあたっておれぬ大晦日　金三
寒むがりも凧をあげてる子沢山　一路
職安の前のトントに背をまるめ　与呂志
寒むがりでスタイルなんぞ言うまずに　庸佑
ストーブへ寒むがり動かぬ人となり　たつみ
寒むがりの前の座席にミニの膝　小路
寒むがりもデートとなれば気にならず　痴亭
寒むがって居れぬスラムの朝を出る　滋雀
寒むがりがいっち最初に汗をかき　柳宏子
寒むがりへ北陸出張命ぜられ　雄峯
寒むがりの旅へカバンが一つ増え　一扇
寒むがりと言われたくない背を伸ばし　小路
寒むがりが今日税務署へ呼び出され　葛城
寒むがりが去年の風邪をまだ背負い　宣介
みの虫を視野に寒むがり着ぶくれる　舟遊
寒むがりのくせに孤独は壁の隅　一三夫
不思議にも風邪を引かない寒むがり　太路

席題「時計」　岡橋宣介選

早くした時計を妻も進めてる　珠笑
目覚しのことで遅刻の朝がもめ　笑痴
この時計進んでまっせと話し好き　一扇
時計見てよけいお腹がへったよな　笑
進ませておいた時計で遅刻する　庸佑
古時計自分のペース守って居　天笑
シャッターは時計通りに管理人　金三
喜怒哀楽一切無精刻きざむ　柳宏子
時計見い見い妻には妻の用があり　摩天郎
労使妥結期せず時計を見上げてい　万的
時計忘れて余計気になる時間　白柳
信用の時計正しく秒刻む　三求
手錠にも似た腕時計に追われてる　柳宏子
叩いたら動く時計の形見わけ　弥生
待たされる時計が刻む応接間　紫香

花時計冬のリズムに耐えている　芙巳代
さば読んだ時計そのまま時を打つ　文秋
作家のペンエンジンかかる午前二時　一三夫
完全犯罪にとめてある時計　勝晴
肱張って見る腕時計は慌てて　葛城
限られた時間へ時計容赦せず　一栄
花時計誰もいない午前二時　芙巳代
スピーチの余裕時計を覗きつつ　形水
初めてのボーナス時計が残ってる　一扇
約束があると時計を見せて言い　紫香
サイレンが違ごてるなどという時計　白柳
遅れてる時計信じているピエロ　舟遊
まちがったままで時計の今日がすみ　たつみ
長針から見た短針のなまけもの　進之助
明日のデイト時計も宵からはずんで　生々庵
天皇の行動時計の中にあり　一三夫
遅刻罰金時計見せ合い笑い合い　宣介

兼題「スイッチ」　西田柳宏子選

スイッチはあなたの番よ共稼ぎ　耕人
スイッチへ油断の出来ぬ児に育ち　芳子
寝かしつけスイッチを切る音にさめ　湖平
リモコンのスイッチ子供押したがり　磯山
停電と知らずスイッチをいじって見　鶴声
定時にはスイッチだけは入れておき　喜仙
押売りの応待女房へスイッチし　どんたく
スイッチを切ってベッドで読まされ気　阿茶
スイッチを押させて欲しい子の背丈　旅風
とぼけ顔スイッチ忘れてシャツ焦し　県吉郎
スイッチの音で機嫌のわかる妻　白柳
会長がスイッチ入れた新工場　清人
サイレンと知らずに入れたあわてぶり　芙巳代
昼休みスイッチ入れたよにしゃべり　一扇
頭のスイッチ接触鈍くなってきた　一栄
スイッチをひねれば盗人顔を出し　摩天郎
スイッチへ疑惑深める消防署　清人
手探りでスイッチ探すすそが冷え　白柳

三月の句会

★原稿は月末着便まで
★書式は本誌のように楷書で書いてください。
——編集部

玉造川柳会（大阪市）
時　三月十一日（月）六時
題　小遣い・実現・動機
所　大阪信用金庫玉造支店

若芽川柳会（堺市）
時　三月十四日（木）
題　むしタオル・あせり・名簿
所　堺市九間町山ノ口筋八木摩天郎宅

南海川柳会
時　三月二一日（木）六時
題　現ナマ・泣きごと・もの
所　ナンバ高架下　親和クラブ

南大阪川柳会
時　三月二十日（火）六時
題　クラシック・小手先・誤解・胸
所　生野区北生野町一丁目二五文秋居近く乗願寺

堺川柳会
時　三月二十三日　六時
題　香水・机・通天閣
所　堺市九間町山ノ口筋八木摩天郎宅

リモコンスイッチの方にしておく無精者　文秋
蛍光灯スイッチひっぱり直して見　恒明
スイッチ一つで巨船も船台滑り出し　瓢太
スイッチを切る隙みせぬ立ち話　吸江
スイッチを切り静寂を取りもどし　庸佑
スイッチの勝手わからぬ新家庭　三喜造
スイッチを押す瞬間の推理めき　勝晴
電気ならスイッチ切るさえ恐い母　吸江
自家発電十時で島の灯が消され　万的
気がついてスイッチ消した影法師　静馬
建売りでスイッチまでもすぐこわれ　一舟
スイッチを踏みつけそうな置炬燵　金三
スイッチを切った切らぬで事故現場　酔升
物音へさぐるスイッチ手にふれず　葛城
背のびして子はスイッチへもう届き　三喜造
スイッチを忘れて家に駈けもどり　酔升
スイッチが切れ洗濯機ホッとする　宣介
スイッチが決め手となった火事現場　吸江
電気には恐くヒューズもよう替えず　文秋
電気釜スイッチ忘れ飯をぬき　柳太
スイッチぐらいすぐに直るとつぶやき　庸佑
戸締りをしてからスイッチ気にかかり　頂留子
スイッチの周囲がぼつぼつ汚れてき　弓彦
停電へスイッチやたらにひねられる　小路
スイッチも年期暗転の舞台裏　三求
スイッチを切ったつもりへ念を押し　水客
タイムスイッチ人生の歪みに気がかり　一扇
コタツからスイッチ近い人が伸び　静歩
スイッチへ今日も人間使われる　一栄
スイッチを切って回って今日を寝る　柳太
共稼きタイムスイッチに任かしとき　一栄
珍客へトイレのスイッチ教えとき　滋雀
タイムスイッチどおりに炊けて冷めていた　柳太
スイッチを切る手へ夜のひえを知る　たつみ
スイッチあるだけ押してやっと点き　白柳
スイアチの位置まで同じ2DK　一舟
停年へ人生のスイアチ切り替える　与呂志
七転八起またスイッチを入れなおし　凡九郎
スイッチへ轟音立てて地球蹴る　太路
タイマーはかけたがスイッチ入れ忘れ　柳宏子

兼題「見せかけ」　金井文秋選

髭おいて見せかけの効く顔にする　日満
ドイツ語を書いてインターンとは見せず　礎山
見せかけに似合わず女燃えてくる　芳子
気に入らぬ筈見せかけだけの嫁　正朗
見せかけの派手さが高利の銭を食い　誓二
見せかけの学習親の気慰み　耕人
粒選りを上積みにして箱みかん　杜的
親切に見せかけ遺産に当がある　白溪子
見せ金にするとは判と知っている　水客
妻の見栄家計の赤を太らせる　柳宏子
にこにこと金に困った顔でなし　吸江
見せかけの善意にしてもできぬこと　形水
筋骨隆々そのくせしょっちゅう風邪を引き　吸江
見せかけに一と役買ってる段ボール　頂留子
見せかけの嵩と承知で買う土産　肖二
温泉のヨーカンと言う中味なり　白柳
社会悪教えることになるみやげ　一路
説明を聞くと立派な香具師の品　太路
見せかけの事務所に社長の髭ほしい　県吉郎
山出しのおぼこ娘に見せかける　勝晴
劣等感隠さんための派手好み　瓢太
見せかけはどうあろうと食べて見る　季賛
どうせ見せかけ大きい方を取り　雄峰
デラックスに見せモルタルの店構え　進之助
一張羅月賦に泣いてるとは見えず　静馬
見せかけの酒豪コテンと寝てしまい　万的
見せかけの政治へ響く物価高　静歩
見せかけも大事と母は娘をさとし　一舟

旅行・宴会・リクリューションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本　社　東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951

守口出張所　守口市京阪本通2-18
三洋電機㈱本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

見せかけの構えに問屋引っかかり　章雅
髪染めて見せかけのよい若返り　弥生
見せかけのバッジそろそろ見くびられ　静歩
見せかけは立派喋ってボロが出る　文秋

兼題「物言い」　小川恒明選

物言いの一番優勝また落とし　杜的
物言いの役目も辛いテレビの目　旅風
えら方の物言い決議くつがえし　礎山
物言いにもう一番を客は待ち　軒太楼
真相を知らず出しゃばり物を言い　正朗
主婦連の物言いおしゃもじふりかざし　清人

物言いがついてファンの気をもませ　酔升
物言いへピリオドをうつ多数決　文秋
物言いのすきも与えずまくしたて　双楽
大衆の署名を物言い集めてき　白溪子
物言いの後の相撲のあっけなし　吸江
物言いの次の直球ホームラン　阿茶
物言いをつけて騒ぎは人まかせ　柳宏子
物言いをうまく丸めた包み紙　吸江
物言いへファン二つに割れてもめ　たつみ
物言いが同じ訛で打ちとける　一栄
市民税の割にはでかい苦情が来る　万的
物言いが出る程今のよい勝負　一栄
物言いにチラチラ前歴ばれかかり　芙巳代
物言いに力士きょとんと振り返り　綾女
物言いの急所握った受け答え　笑痴
痛いとこ突いたつもりが逆効果　一三夫
境界の物言い地図では片付かず　珠笑

物言いを軽くかわしてマイペース　笑痴
物言いがついて事件がまたこじれ　酔升
物言いに物言いつけたいひいき筋　庸佑
合槌ちが有って物言い得意がり　太路
存在を示す物言いつけてみる　水客
異議なし異議なし宴席待ってます　小路
弱腰の後で物言いはがゆがり　柳太
物言いがついてもやっぱり勝ち　三求
物言いへ賭けた勝負の眼が光り　弥生
物言いの写真で見れば負けていた　一三夫
物言いをつけて自分をなぐさめる　水客
一言居士とかくいやがることを言い　一三夫

兼題「住所録」　黒川紫香選

住所録のとおりのハガキ舞いもどり　芳子
住所録嫁いだ子らのとこも書き　正朗
住所録ライバルへ嫁った人を消し　阿茶
住所録無職らしいと思わせる　喜仙
金蔓は漏さずホステス住所録　章雅
住所録もうつし手帳も年あらた　日満
住所録バーの電話は裏に書き　杜的
腑に落ちん名前もまじる住所録　小路
急ぐ時住所録の見当らず　季賛
住所録さがしあぐねて電話帳　痴亭
年賀状書くだけに要る住所録　珠笑
追憶にふける斜線の住所録　文秋
退院は看護婦の住所控えとき　生々庵
住所録古番地のままとどき　一栄
住所録一人一人の顔となり　滋雀
住所録年賀と共に入れかわり　喜恵
名を成して英字もまじる住所録　一三夫
一つ消ゆ又一つ消ゆ住所録　葛城
住所録自分の城を知らされる　水客
葬祭に急にあわてて住所録　双楽
かんじんな女が抜けてる住所録　失名
住所録出世コースをゆく転居　形水
ドヤ街の余生に要らぬ住所録　白柳
本宅と二号がならぶ住所録　白溪子
旧姓でまだ呼び合うている住所録　柳太
発展の社業に厚い住所録　弥生
年賀かく時だけ開く住所録　金三
住所録落ち目に頼る人がなし　双楽
もうそこに居りそうもない住所録　たつみ
住所録余生などとはまだ言えず　与呂志
仲の良い順に列べた住所録　水客
書き替えるのが邪魔くさい住所録　静馬
ホステスの住所録に書き込まれ　白柳
移転通知挟んだままの住所録　笑痴
くせ悪い人やと住所録を消し　白柳
住所録書き替えさせて職を変え　万的
紫香

雅号ぶっちやけばなし（39）

とてき

松川杜的

まつかわ

何となくつけてもらって何となく使っているのが私の雅号です。「杜」という文字は何となく私が好きな文字であり「的」という文字は先輩の万的さんをその当時知っていた人が付けてくれたものらしいです。杜と的では何となくつり合わぬ気もし、呼名もしにくいのですが、川柳を始めて以来ずっと使っております。愛着というものは恐ろしいものだとつくづく感じ入っております。他人様の「雅号ぶっちやけばなし」を拝見してそれぞれにあるエピソード等を知らされいささか淋しい感じもしますが、今のところ改号も考えておりません。色気もへちまもない記事で失礼いたしました。

国鉄職員　五十三才

名地物壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会　金井文秋報

ハミングできつねうどんが届けられ　滋雀
やりくりを見ている妻も気がつまり　好郎
本人の徳がそうさす名誉職　金三
国訛り誠意を示す語につまり　柳宏子
束の間のまこと神殿に手を合せ　弓彦
名誉職ふる程あってまだ無職　静歩
裏切りになってしもうていたまこと　古方
名を貸してその役柄はよく知らず　文秋
同感やけど赤旗はよう振らず　一舟
銀行もやりくりがあり決算期　吸江
年長として断れぬ名誉職　形水
同感をすれば沽券に傷がつき　双楽
年の暮火の用心も名誉職　喜風
あほらしく思う日もあり名誉職　あいき
話せば同感票入れれば割れるなり　干梢
名誉職好きな議員は当てがあり　綾女
名誉職欲しいが一応辞退する　肖二
世話好きもここまで来れば名誉職　県吉郎
なさぬ仲まことの愛を受け流し　智子
同感の歳暮廃止に踏みきれず　静馬
いつの間か逼塞してた名誉職　章雅
ハミングで着更えているデイトの娘　一栄
握る手の強さにまこと通じあい　野迷路
女一人まことしやかな口で貯め　頂留子

堺・富柳会・若芽・交流吟行　八木摩天郎報

すずなりの渋柿夕日に美しい　きはち
干害を知らぬすずなり拝まれる　宏子
値上げしてまだすずなりで着く電車　左久良
さえずるはひよか目白か竜泉寺　痴亭
スモッグの街にも百舌鳥はけたたまし　流月
苦吟する頭に小鳥の声入らず　柳太
分校の理科は目白の子を育て　柳志
働かんでええご身分で相談役　吸江
働いても働いても喰えぬ子沢山　金三
おれの趣味働くことだと煙に巻き　静馬
親指は奥の不在をたしかめる　笑痴
其奥が知り度い男の眼が光り　阿岐良
おもちや箱一番奥は好きなもの　茂美
露路の奥へ逃げて泥棒運のつき　双楽
大和路の奥にもあったハイウエイ　凡吉
奥伝へ涙の金が包まれる　小松園
無理とはしりつつ押し通す辛さ　しげの
結ばれた経緯をあばく披露宴　草春
結ばれて良かったと云う妻のウソ　青香
ネクタイを結べばファイト湧きあがり　花梢
登山靴結ぶ脊中へ念を押し　美房
古くとも親に結んでもらう縁　摩天郎
結ばれた後案じるも母なれば　千万子
帯やっと結べた見合いの日の鏡　好郎
現金で払うと下請に無理を云い　六竜子
忘れよは無理ひとり寝の夜のしじま　東雲楼
このショックおちつけと云う方が無理　美代
あんたには無理な仕事と見くびられ　遊仙
あんまの手ちょっと緩めと無理を云い　天笑
もうよいと言うのに無理な飯をつぎ　白柳

玉造川柳会（大阪市）　西出一栄報

金策も出来ず木枯しの帰り道　好郎
北風が少年の顔まっかにし　一舟
プラモデルあとは煙突つけるだけ　亜成
煙突のハンスト男旗を振る　肖二
公害へあの煙突と又云われ　凡九郎
煙突の高さを無駄にせぬ社名　文秋
スモッグへ煙突図太い煙出し　柳宏子
越して来てこんな処にある市場　古方
水かけて市場キャベツを売り残し　柳志
共稼ぎ今日は夫が寄る市場　六竜子
昼寝うとうと電話のベルを聞きながら　風仙洞
手枕の昼寝父ちゃん夜勤あけ　千梢
万策が尽きて策士昼寝する　はじめ
小春日を二号は猫と昼寝する　章雅
午下り猫一匹が寝たコタツ　貞山
いやな客昼寝は二階へ難を避け　鬼遊
乳呑児の昼寝にそっとミシン踏む　義介
じわじわと急所つかれた背の汗　滋雀
じわじわと痛いところを突いてくる　季賛
追われてもじわじわ猫のひざに寄り　一栄
後悔はせぬ胸の中又うずき　千歩
雲行があやしじわじわ坐り替え　白柳
夜も更けてじわじわしみる孤独感　綾女
じわじわとモグサの熱さ身にこたえ　誓二
首しめるようにじわじわ値が上り　宏芳
じわじわと男の弱いとこを衝き　形水
袖の下納まる目と目通じあい　彦静
女房を口説いて今年の飲み納め　馬井
嘘まぜて納めた嫌な戻り道　平金
見納めの故国へ手を振る移民船　三

玉造川柳会（大阪市）　西出一栄報

しょうむないことをオームに覚えられ　文秋
酔った夜の父の真似して笑わせる　晃
物真似を親馬鹿ものになると決め　恒明

おしゃべりのマスクつけたりはずしたり　照一
理髪店なじみへマスク邪魔になり　柳志
マスクまで惚れた女によく似合い　静馬
ガスマスク生きてほしい人ばかり　古方
ライバルの前をマスクのまま通り　小松園
松飾り気楽に酔うている　千梢
日本画の味を岸辺の松にみる　柳宏子
団地向門松もあり鏡餅　宏芳
門松の明治生れのいるかぎり　一栄
松飾り印刷にして事が足り　井平
産声に一歩踏みこむ妻の部屋　誓二
親の手がうるさがられた第一歩　滋雀
佳い日がら水引かけた松をいけ　形水
我が庭と思えぬ景色松に雪　一舟
手加減も忘れて本気になるゲーム　千歩
ニコニコと母は餅焼くゲームの輪　義介
福笑い目鼻いがんで大笑い　綾女
カルタ取り負けて母ちゃんヒゲが生え　貞山
ハンデーの加減に苦労するゲーム　弓彦
七並べ根生の悪い人にされ　恭太
七光り秘めて入社の第一歩　章雅
荒波と斗う始めての背広　清子
停年で職を変えての第一歩　肖二
病いえ我が家へ軽い第一歩　あいき
好きな人出来て再起へ第一歩　鬼遊
踏み出した一歩へゴールのないあ　六竜子
第一歩これから先へ念を押し　季賛
七光り倖せすぎる第一歩　金三

川柳たましま　水粉千翁報

意地がない行きつ戻りつふところ手　慶子
行きつ戻りつ男打算の恋である　貴志朗
あじさいの今日紫につづく思慕　寛子
針運ぶ妻の背まるくすき間風　鼓草
大物になり肩書の無い名刺　三林坊
煮えつまる時に電話のベルが鳴り　八笑人

肩書が通るほんとにせまいとこ　千翁
肩書がものを云ってる黙ってる　柳子
むらさきの帯あきらめの金をはせ　三林坊
あれ以来心尼僧として生きる　柳子
妻に似合すぎるむらさきを憎む　貴志朗
人信じ行きつ戻りつ白い杖　扇水
日記帳このあたりから隙間風　梁水
豊年へ神輿はつつがなく暴れ　千翁
息つまる雰囲気表情が恐るしい　旭峯
尼僧いまマンガを読んでる午后の雨　里風
月まるし尼僧過去を捨てんとす　林鶴
お手頃というお歳暮の詰合せ　朝二
どたん場に来てから親が先に折れ　旭峯
曲り角愛が涸れそうすき間風　秀子
肩書の金になるのは見当らず　麗水
愛憎の去来へ白い迷い鳩　里風

高知川柳社　川竹松風報

青空が運動会の子にうれし　舞子
窓越しに見る秋空へひとり病み　文子
澄みわたるわが故郷に職がなし　たかし
忘られたように四十を平でいる　武司
良縁の前に忘れぬ恋に泣き　十考
算盤は一級経済力に欠げ　勝子
まだちがう算盤筆算で用を足し　伸
五ツ玉やはり明治の人のもの　斐山
母のよむ家計簿子がひろい柳　水
素晴しい赤字路線の夕景色　美知
落目を背に黒人と腕を組み　一人
同じとこでまた叱られる舞扇　竹荘
菊日和和服が似合う姉妹　紅雨
一発がこころで欲しい四十すぎ　桂緑
タイミングよく信号にあやつられ　松風
値上りへぐちの通りのプラカード　天樹
放心へ塔の高さのほかになし　大破

飛行機でかけつけたという通夜の客　直喜

大鉄川柳会　辻白溪子報

催促に菓子折りのいる家であり　宗悟
餅つきに姉さん被りが一人ふえ　一求
引越しの積込み他人の手で終り　白溪子
二次会で幹事が腰を据えて飲み　永断
約束は約束ちゃんと利子も取り　飛鳥
お座敷を替えて二次会派手になり　客遊子
カンパンへ冷ゃで良いからくれと云い　三求
終るまで見る気弥次馬ひまらしい　担水
借金の催促に似た歳暮来る　万的
約束を果たし男の意地を見せ　尚山
眼が醒めてみれば二次会帰るとこ　求女
法の裏知って催促もめておりたつみ
餅つきの傍で大根おろす役　夘門
催促状昔の借りを思い出し　季賛
千鳥足まだ二次会へゆくつもり　実男
催促を待ってたようにピエロめく　水客

備前川柳会　目賀芳月報

宿題が解けずテレビに笑われる　久米雄
宿題がまだまだつづく五十代　正州
暴露する腹宿題としておこう　秋月
人生の宿題未だ解けぬまま　三平
宿題にしておきましょうとうまく逃げ　柳子
宿題をさせるおやつを見せておき　一声
宿題をだしに用事をうまく逃げ　幸仙
宿題の言訳になる農繁期　しん平
他人から見れば羨やむ子に悩み　飴ン坊
愛と言う自信他人の子を叱り　芳月
急逝へ津波の様な他人の愛　万女
里帰り他人行儀を少し見せ　胡風
金借りる話へ他人の顔になり　浄美
他人の飯骨もだんだん減って行き　楽天
宿題となってひとまずけりがつき　溪泉
受けた恩忘れず立派に菊が咲き　三六

まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

拡張路ごて屋一軒はみ出てる　扇里
一人行く足に枯葉は冬の音　立児
退職金使い古した印で受け　茂児
枯葉落つる音雨のごと山の宿　瓢太
交際費部長の印を貰ってこい　星斗
枯葉枯葉母なる大地へ飛んでゆく　寿子
結局は値切れずごてただけの損　幸子
この道ももう枯葉あの人は遠い空　好郎

あすなろ川柳会（大阪市）川村好郎報

こんたんのある総会へ早う着き　ゆきを
総会は書類の上ですませとき　弓彦
総会という名で一杯飲んでくる　慶之助
床下にあるローソクが膀に落ちず　素郎
総会の時だけ顔出すいけるロ　好郎

ウイロー社句会（ハワイ）　快夢起報

かみなりの予感へ呼ばれる社長室　快夢起
予感など当てにしません入試の子　魔花麗
交渉かはねてしまえと吹く煙　暁舟
交渉へ男の意地を立て通し　あき坊
ドアーベル予感通りに金が着き　蒼蛇楼
ラスベカス甘い予感で出掛けたり　拝山
秘密裡の交渉ありと見透かされ　エス女
妻病みて若しやの予感先に立ち　要人
交渉はお金のことで行きづまり　紅溪
天災の予感があったと後で云い　雪女
交渉を待つ間の長いストライキ　紅茶
意のままにならず予感当てにせず　立石
交渉も女が入ってまるくゆき　カロ女
きっと来る予感そわそわ薄化粧　泉水
へそ繰を予感と夢をあてに賭け　浮草
のしかかるような予感になるすくみ　峯円
予感など真実一路知らぬ顔　内海
眉つばの予感株屋の口車　柳葉

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻圭水報

ロッカーの隅にエクボのある写真　草春
ロッカーにもたれB・G何思う　東雲楼
ロッカーの前がデイトの出合場所　句念坊
ロッカーが非常持出しとは殺生な　貴山
二重帖簿やなあとロッカーの前で　摩天郎
ロッカーの捜査をされる社の最後　宏子
ロッカーだけが犯人知っていた　圭水
集金はロッカー駅の湯につかり　好郎
ロッカーに喪章も入れて庶務課長　笑痴
青写真ロッカーへ来て暇がいり　金三

ささやま句会　小畠無聖報

タイミングよく咳が出て助けられ　古仙
咳ばらい何日のまにやはくがつき　たつお
咳一つしたばっかりに見やぶられ　初仁
咳一つそえて祝電披露され　千尺
家内中吃驚させた牛の咳　茂広
父に似た自分の咳にふと気付き　初音
咳一つ油断の出来ぬ床につき　実世
意見され後味のない有難さ　猪村
毒舌のあとはけろりとちよこを受け　与志
陰口のあとあじを消す窓を開け　ゆきお
盗み菊後味悪い花が咲き　梅枝
値上りを見込んだ造成地が崩れ　枝葉
湧き水の幸は値上り知らず暮れ　寿栄
負傷までして値上りのストかなし　をさむ
主婦連のとかぬところでちよっと上げ　可住
値上りを年頃容赦なく太り　清香
米寿でもまだ来年に望みかけ　一筆
来年を境に若が立つあせり　みのる
千切れ雲ジッと見送り我が前途　ヤン坊
ボーナスへ今朝の見送り念が入り　村雨
送るとき愛の言葉が喉で消え　青峯
志とげた車で送る母　無聖

むらくも川柳会（島根県）藤井明朗報

貫禄が下座へすわるめでたい日　昌生
じっとして居て貫禄ものを言い　鶏
貫禄が出来て世間は捨ておかず　正朗
貫禄が出来ると血圧気にかかり　英子
若芽まだ霧氷の底で夢を追う　白汀
この若芽どんな花やら紅葉やら　一郎
新課長貫禄つける印をかえ　清泉
街路樹の若芽ここにも春の音　芳子
犯人は孫か若芽が消されてる　加勇
玉葱の若芽がのびてやせ細り　代
水仙の若芽は雪を割って咲き　文子
春遅き拓地は若芽筆わらび　美栄
雪すさぶ中に柳の若芽ふき　華宝
奥様の貫禄少し太りすぎ　明朗
貫禄へ仲人役を頼まれて　孝華
着ぶくれを又おめでたと違えられ　比年

むらくも川柳会（島根県）藤井明朗報

急ぎ足月も一緒についてくる　芳子
急ぎ足止めて遮断機鳴りつづけ　一郎
急ぎ足晴着の裾が気にかかり　英子
急ぎ足もう雨になり諦めの　加代
急ぎ足今日の約手へまとまらず　清泉
血庄も忘れ師走の急ぎ足　白汀
一人二人三人追い越す急ぎ足　祥月
急ぎ足ふと立止る名調子　比年
意地悪の効果テレビのまま試し　文子
意地悪い先生と親は思い込み　枝美
意地悪と知って素知らぬとぼけ顔　節子
意地悪をされてもやはり好きな人　湖枝
奥様の意地悪お金にもの言わせ　明楽
家計簿へ赤字のつづく伸びざかり　朗朗
家計簿の予算も狂う物価高　正朗
上きげん仲人笑顔の急ぎ足　友子
家計簿もつけずせつせと金を貯め　孝華
鶴丸

意地悪にされても女気かつかす　勇
家計簿の黒字三桁で十二月　縁之助

川柳たけはら　山内静水報

テレビ見る時だけ弟しずかだな　清子
スケジュール教育ママに決められる　洋子
日曜日だけど家には誰れもいず　紀美子
試験勉強食べてばかりでまた肥り　宏子
はつきりとけじめをつけた日の不安　浄美
疲れたの明日はゆっくり洗濯よ　経子
除夜の鐘聞いてるうちに寝てしまい　康宏

以上学生

サービスの玩具帰りに紐がとれ　こふみ
納豆の糸へタイミングを狙い　操子
ヘアピースとれば男のような髪　よし恵
荒波の中へ親友出来ました　延子
とっときは妻に内緒のかくし芸　マスエ
釣竿が並んで川に風もなし　さい子
一生懸命だった一年悔いはなし　そのみ
仕舞風呂今日の寒さを忘れさせ　房子
菊くずるように女のあわれなり　笑子
孫の守して暮すにはまだ遠く　凡女
内職をやめろと言えぬ身の辛さ　英詩
バスの窓赤い柿の実とどきそう　清子
勇気ない男と言われ笑っとく　文晴
病む床の視界は冬の冬の色　春昇
その先は言わない事で許し合い　笹舟
すぐけじめつけて冷たき人にされ　政己
お守りがスピード叱るように揺れ　菁居
好きですと書いて逢うのが恐くなり　蘭幸
明治百年お猿の智恵を借るもよし　静火
妹にやるお年玉兄と決め　静雨
居てくれぬボーナス父と子見せ合って　静水
由緒ある街を流れて川の澄み　静波
木枯よ吹け吹け吾が家の灯が温い　峰泉
月光を浴びてネオンのおろかなる　不朽
ばらに似て野菊にも似て迷わせる　一路
我は今日ピエロで踊るかくし芸　芳則
吾が家の灯心の鎧ぬぎ捨てる　不動
蟻の列どこへ行くのか日が暮れる　鬼焼
来年は買う約束の服を着せ　筧水
下戸不覚紅茶の中のウイスキー　清太郎
土に生き六十年の背が丸い　扇水
不貞寝する青春の思想薄れ　康徳
ジェット音しきり中断の保育園　草人
ふたありで歩けば舗道黄昏れる　和尾
角帽が泣いてる理性をハデに見せ　信二
友達のノッポが肩を組んでくる　泰人
やり損じでもかくし芸拍手湧き　松緑
かくし芸丸出しにして酔いつぶれ　天石庵
水仙へ冬の陽ざしのやわらかさ　紫苑荘

成年・結婚記念句会（竹原市）静水報

お年玉父ちゃんぜったいちょうだい　清子
じっくりと去年の日記読んでみる　洋子
お歳暮が届いて父の酒ばかり　紀美子
まっすぐなタイプで出世を妨げる　勝彦
一つだけ片手でついた除夜の鐘　浄美
ラブレター字だけ上手になりました　経子
かりそめの恋さ未練のない港　花仙
事故現場九死に一生得たところ　清太郎
最初から合わぬ話へお茶が冷え　天石庵
ミカンの皮が仰山できて松がとれ　紫苑荘
まつすぐに生きて汚れを気にしない　扇水
青春の恋曲線のないレール　康徳
ボス猿も恋をささやく日向ぼこ　季賛
恋知ってからのニキビがよく太り　松風
寄り添うて二人はまっすぐ歩くだけ　延子
子沢山村を沸かせた恋の果　こふみ
まっすぐに帰る夫がものたらず　マスエ
まっすぐな性分ゆえに孤独なり　泰造
あほらしくなって甘党席を蹴り　菁居
ママと子の晴着をパパが撮ってくれ　そのみ
元朝のしずけさでっかい日が昇る　静水
もう五分ねかしてあげよう高いびき　房子
土根性むき出しにして勢を出し　不動
元朝の心愚妻に申し上げ　峰泉
その先を問えばあなたに仕せます　笹舟
元日の和服きれいなおじぎする　春昇
やがて米研ぐ指先を愛おしむ　不朽
甘えてるのか故郷が嫌になる　文晴
逢うたびに痩せたでしょうと言う彼女　蘭幸
足音がドギットさせる年の暮れ　雅風
水平線四十の歩みへちぢまらず　政己
迷ってる心と知っている悪魔　一路
お帰りの寒さねぎらう鍋の湯気　凡女
お元日軒の雀も春を告げ　清子
晴れ姿小雪サラサラ降ってくれ　笑子
紅白戦も見ずに終った小商人　よし恵
音もなく雪の元旦暮れてくる　操子
フレンドを紹介妹に見直され　静雨
ご返盃今日の主役は飲めるロ　静火
八十三キロ兄貴茶碗を丸くもち　芳則
初雪にふると想う餅がやけ　英詩
変りばえせぬ元日をめでたがり　自然
切りつめた暮しになれて共稼ぎ　鬼焼
孤独からかえった猫の日向ぼこ　静波
事情ようのみこめないと腹を立て　草人
偏屈にされ偏屈の気に入られ　季賛
腹たてぬ年と決めたる寝正月　酔舟

ふじかげ短詩睦会　藤本礎山報

母ちゃんの料理が鼻へ呼びかける　敏彦
よく見ればどの鼻もみな顔に合い　保夫
清らかな瞳へ鼻までは考えず　久美
幼稚園みんな可愛いいひくい鼻　二朗
低い鼻うごめく今日はついている　喬

▼おことわり編集上以下次号。

・2DK・

★毎年三月号は女流作家だけの特集をしてきたが、ことしは理事会の企画で男性女性の混成で座談会をすることになった。三井酔夢さんがわざわざ香川県から出席してくださるなどにぎやかだったが、主役の女性側の個性が出ていないのはチト遠慮されたのかナ。

★明治百年を記念してなんでも〝百〟ばやりだが、ウチも二年連続で〝路郎百句〟を特集した。そこでこんどある人から、同人特集として〝自選百句〟のはなしがあった。その出場者は昨年十一月号に谷沢好祐氏が発表した秀句鑑賞掲載の上位陣十氏に選者級三氏の名が挙げられた。

★新年号から発表したかったが、なにしろ自選で百句ともなれば、そう簡単にはいかず、とにかく本号には後藤梅志氏と橘高薫風氏にご登場ねがった。

★〝自選百句〟四月号は内藤きさ子、若柳潮花、五月号には工藤甲吉、早川清生六月号は正本水客、石倉旅風諸氏ほか好作家が待機している。

★次号は清水白柳氏の〝川柳明治百年〟と椙元紋太先生から〝近詠百句〟をいただいている。そのほか百人集も予定している。百人集というのは路郎賞と川柳塔賞の候補作品からご登場ねがうものである。

★今の若い人たちには〝明治百年〟なんてクソおもしろくもないことだとおもうが、なんでもいい、コレを記念して新しくスタートをきることだ。

★三代目三遊亭円馬（落語家・昭和二十年一月十三日没）が、明治の末期に〝衛生料理〟という落語から〝明治百一年の料理屋〟というのを高座にかけている。「明治百年ごろになりますと、器具・家具にいたりまするまで、日々完全なものができてまいりますが、人体ばかりは後へもどりまして、浮華文弱に流れ、完全な兵士というものが、一人もできなくなる」と語りだすのだが、ちょっと痛快な空想落語ではないか。

★三月号からまたすこし部数をふやすことになった。これで二回目だが、後もどりせずにふえていくことはなんとしても皆さんのご援助のたまものである。

☆皆さんから「放送はどうなっているのか」と、ゲキレイされているが、目下開店休業中で、そのうちにカムバックしたいとねがっている。とにかく読書もロクにできず、柳務の雑用に追われっぱなしである。

（不二田一三夫）

川柳塔社三月句会

日時　3月8日（金）午後六時
会場　自安寺（妙見さん）
市電千日前下車スグ北側
（電話211・1478番）

兼題　柳話・米・墨みやげ　若本多久志
「ブーツ」　樋口舟遊選
「陽当たり」　長谷川三司選
「公害」　正本水客選
「決心」　川村好郎選
席題　三題　当日発表　各題三句
会費　百五十円
★　投句だけの方は切手五十円封入

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話大阪(271)3985番

4月の兼題　「百年」「新築」「ベテラン」「流れる」

タチカワペン
優雅な書き味
TACHIKAWA
本社の郵便番号は五四二

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　若本多久志選
課題吟（各題5句以内）
「心配」　遠山可住選
「代表」　田中蛙眠子選
「駅」　植村容遊子選

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　若本多久志選
課題吟（各題5句以内）
「愛称」　野村岬月選
「コーヒー」　林　葵瓜選
「伝説」　越智一水選

クラボウ
東レパーマネントシャツ
ポリエステル（東レテトロン）65%　綿35%

・募　集・

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。
★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価　百二十円（送料六円）
半年分　七百五十円（送料共）
一年分　千四百四十円（送料共）
昭和四十二年二月二十五日印刷
昭和四十三年三月　一　日発行
大阪市西区靱南通之四一番地
編輯兼発行人　中島逢太郎
印刷所　大陽印刷株式会社
郵便番号　五四二
発行所　大阪市東区鳥居通之一番地
川柳塔社
電話大阪・な・ん・ば（六四一）九九九番
振替口座大阪・五三三九九番

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十三年二月二十五日　印刷
昭和四十三年三月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔　三月号

定価　百二十円（送料六円）

南紀の旅は なんばから

＜白浜ゆき＞　なんば発時刻

急行　第2きのくに　（毎日）　12時45分発
急行　南紀 3 号　（毎日）　16時38分発
急行　臨時しらはま　（土曜）　13時10分発

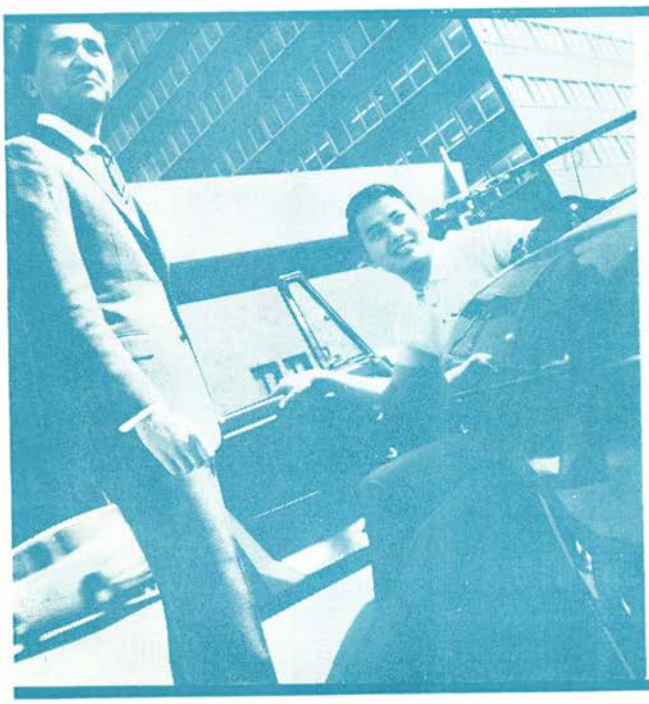
＜新宮ゆき＞　なんば発時刻

急行　南紀 1 号　（毎日）　7時45分発
夜行直通列車　（毎日）　22時09分発

●第2きのくに号は座席指定券を　他の列車は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問合わせ・南海交通社
(641)8686　(341)5033

南海電車



気品あふれる シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。
その秘密は、東レテトロン＝激しい動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。

オルテロン

東レ テトロン（ポリエステル100%）
オルテロン
スーツ・スラックス
Toray 東洋レーヨン株式会社